

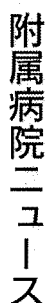
編集発行
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail : idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元ゐのはな同窓会長)

e-mail : idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

るのはな同窓会總會開催

大浜博利理事の司会により、渡辺武副会長から開会の辞が述べられた。会議に先立って、物故者89名の冥福を祈り、黙祷を捧げた。



病院長 伊藤 晴夫（昭39）

〔平13・4月～7月〕

ンサート

今回は医学部学生等有志
によるコンサートで、琴・
バイオリン等の演奏が行な
われ、楽しい一時を過ごし
た。

平成13年4月10日 助産婦
学校入学式

引き続き、平成13年度ゐ
のはな同窓会賞の表彰式が
行われた（関連記事は本号
8～12面及び127号に掲載）。



医学部附属3学校が平成14年3月で閉校となることから、最後の入学式となった。

平成13年5月7日～11日
医員（研修医）ガイダンス
本年度採用の医員（研修医）を対象に、実習を主体としたガイダンスを実施した。このガイダンスは研修医が研修を始めるに当って

平成13年6月18日～26日
医療事故防止ビデオウイ
ク

医療事故防止の一環として、医師、看護婦、コ・メディカル部門等の教職員を対象に「なぜ医療事故が頻発するのか・どうしたら防

「けるのか」教職員一人ひとりが医療現場の中で率先して意識改革を目指すことを目的として行なわれた。

平成13年6月21日～22日
第55回国立大学医学部附属
病院長会議

北海道大学を当番大学として行なわれた。議題は、卒後臨床研修の必修化への対応、医療の安全管理体制、医療技術職員の人事交流の

推進 独立行政法人化に向けての国立大学病院の評価などであった。この後行なわれた常置委員会において、引き続き千葉大学が委員長となった。

平成13年7月2日、共通
研修セミナー

研修医が、プライマリケアに適切に対応できるために、各診療科の協力によって、実践的で広範な最新の基本的知識の修得を目的として行なわれている。隔週の月曜日18時〜で来年の3

平成13年7月11日 千葉大

学医学部附属医院临床医学
研究助成会

附属病院は千葉県の財界より研究助成を受けているが、この助成会の総会と学術講演会がホテルニュートンで行なわれた。講演は伊東久夫教授による「最近の癌治療」であった。

<http://www.inohana.jp/>

同窓会ネットワークの足場のひとつとなる「ゐのほ

ターネットにアクセスできない会員のために、抜粋を

本号に掲載しました(22・23面)。
ホームページに関するご意見は info@inohana.jp まで。

みのぼな 同窓会



Copyright (C) 2007 The JOHANA alumni association. All Rights Reserved

ゐのはな同窓会ホームページは緑を
基調にした落ち着いた雰囲気のパージ
です。

るのはなの我が恩師(3)
教授就任挨拶
るのはな同窓会賞受賞者の言葉
同窓会員著書の紹介
産科婦人科学教室同窓会の昨今
新人生早期学外研修報告
クラス会
各地るのはな会だより
卒後臨床研修必修化に向けて
貫洞一夫先生の喜寿の祝
人事異動
るのはな同窓会総会議事録

[illegible]

るの
はな
同窓
会賞

受賞候補者募集

第7回(二〇〇二年度)ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を募集致します。詳細は23面をご覧ください。

「るの は な の 我 が 恩 師 (3)」

永野 俊雄 (昭30)

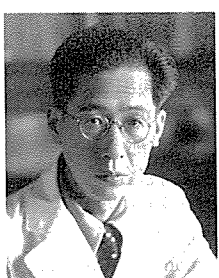
石川憲夫 (内科学)



東大卒、教授在任期間昭和9年—30年。

当時の臨床教授は臨床講義と時々の教授ポリクリが学生と接する時であった。風貌がチャップリンと似て白髪長髪で、チャップリンと呼ばれていた。当時の大学病院は教育病院に徹していたので、患者さんは教育のためデモにされた。肺雑音とか、肝の触診とか、基本的な診療法を示された。学生には治療はあまり教えず、病態と診断法が主であった。カタル性黄疸の治療はシジミ汁が良いと云われた。教室には湯田好一、村越康一、杉村祐一、北条龍彦、白壁彦一等がいた。

斉藤十六 (内科学)



東大卒、教授在任期間昭和28年—48年。その明快な臨床講義で強い印象に残っている。心電図の講義は當時まさに驚嘆した。循環器、神経病、血液病の臨床講義をされた。臨床講義はプラカンとよばれる学生代表がその患者さんの病状を予習して、教授の質問に答える方法が多かった。医局員は皆千葉医大の出身で、東大から乗り込んだばかりであったので、張り切りすぎた印象があった。臨床講義の場が学生よりは医局員との討論に使われた様である。東京から通われ、大学には外来日、学生講義以外には自宅研究のことが多かったようである。専門の内科ばかりでなく、臨床医学全体の事を教えられた様に思う。はじめて心カテが行われたと聞いている。学生との質問には親切丁寧に説明して下さった。教室員には非常にきびしかった、と聞いている。大学紛争中の輸血事故で引責退職された。教室には松本脩一郎、稲田武夫、谷茂岡洋一、茂又真裕、稲垣義明等がいた。

河合直次 (外科学)



東大卒、教授在任期間昭和16年—34年。

外科の臨床講義は患者さんの供覧とその手術の見学の外科が主であった。当時の臨床講義の手術はオープンで、手術を学生が上からのぞけるように手術室は階段教室となっていた。麻酔も閉鎖循環式的全麻酔はまれであって、ルンバールと局所麻酔が多かった。肺結核の胸郭整形手術も盛んであった。外科の基本的概念を教えてくれた(トーテンラムム、ドレーン、シヨック等)。教室に綿貫重雄、伊藤健次郎、香月英雄、島村欣一がいた。

中山恒明 (外科学)

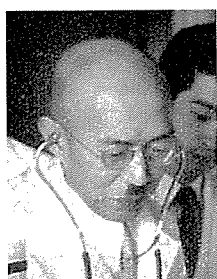


東京出身、新潟高校、千葉医大卒、教授在任期間昭和22年—39年。

学生に教えることその臨床講義のやりかたがまったく独特であった。例えば外来の新患を全部中山教授が診た。その前に消化管のレントゲン写真が用意され、自信にあふれた態度で患者さん、学生に接した。即座に胃潰瘍、胃ガンの診断を外来でおこなった。臨床講義も診断の根拠、手術の必要性を説明し、胃や胆嚢の摘出等、あつというまに終わった。メスの走りは書道の筆のようで学生でさえその見事さが分かった。当時手術の終わる時間が問題であった。摘出された臓器の病状、硬さ、色等をその場で学生にさわらせた。学生の目にも河合外科と大変に異なっていた。まさに外科が天職のようであった。当時は頸動脈小体の摘出が気管支喘息に効果があるといわれ、盛んに行われた。また胃潰瘍からの癌化が信じられていたため、胃潰瘍の手術も盛んであった。医局には診療にあたっての失敗事項が経時的に張り出され、その失敗を繰り返さないことを頭にたたき込んだ。その当年度々渡米され、中山式手術を伝えた。教室には中村武、牧野博安、その他がいた。筆者の千葉大学の恩師教授で唯一ご存命

である。長寿を祈ってやまない。

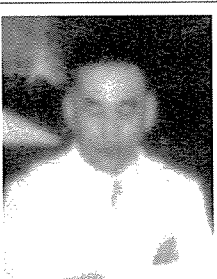
佐々木哲丸 (小児科)



東大卒、教授在任期間昭和22年—38年。

小児医療が大人といかに違うか、小児の栄養問題(自家中毒、発育不良)、小児感染症、小児内分泌病を講義された。基本的に新生児がどのくらいミルクを飲んだか、何cc小便をしたか、の基本も教えられた。学問一筋で趣味や学生課外活動にはタッチされなかった。教室には中島博徳、吉田亮等がいた。

荒木直躬 (精神神経科)

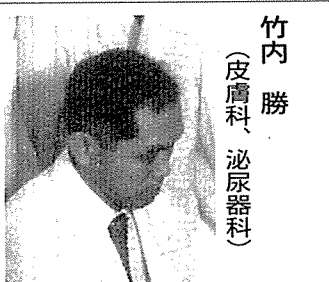


東大卒、教授在任期間昭和10年—36年。

精神科は病室、研究室、講義室は独立していた。ここで精神科の臨床講義が行われた。講義はドイツ語で

難解であったが、殆ど毎回患者さんのデモがあったので学生の出席はよかった。三大精神病、神経梅毒の話を中心に聞いた。脳脊髄液の検査法を示されたときの印象は今でも鮮明である。姿勢が良く大柄でどこか雲の上の人の様な存在で、学生はあまり個人的には寄りつかなかった。趣味は囲碁で講義中に碁の記録を出され、棋士の精神異常を示すような所を解説された。碁を分からね者はなお、分かる者でも難解であった。古い碁の棋譜の蒐集家としても有名であった。教室に松本胖がいた。

竹内 勝 (皮膚科、泌尿器科)



土佐の土族で、土佐高、千葉医大卒、教授在任期間昭和27年—45年。

たけのうちかつと読む。通称デルカッさん。学生には皮膚病があれば種類があるとは思わず、それをラテン語であげられ、皮膚の病的変化の術語についても難解な講義であった。ポリ

クリの患者さんとの応対も独特で、忘れられない。学生は恐ろしくて近づかなかった。卒業試験は外来新患患者さんについての所見、診断等を口頭試問で行われた。まだ皮膚科と泌尿器科は同一教室で、泌尿器は百瀬剛一が担当された。

岩津俊衛 (産婦人科)



東大卒、教授在任期間昭和13年—33年。

婦人科と産科の臨床講義で、分娩時の児頭の回転、異常分娩の診断と対処法を子宮癌、絨毛上皮腫、妊娠反応、等を講義された。独特な表現は忘れられない。趣味は三味線とテニスで、留学中にウィンブルドンを見たと話された。三味線は芸者以上と噂があった。教室には御園生雄三がいた。

北村 武 (耳鼻咽喉科)



茨城県出身、浦和高、千葉医大卒、教授在職期間昭和26年—52年。

我々学生時代に最も若い教授であった。我々の新入生歓迎コンパにも、出席された。そのときは頸から上の外科と紹介された。副鼻腔炎、唾液腺腫瘍について

教授就任挨拶

循環病態医科学教室

小室

一成(東大昭57)



平成13年4月1日付けで増田善昭先生の後任として千葉大学大学院医学研究院先端応用医学講座循環病態医科学教室(旧内科学第三講座)を担当させていただきます。当講座は昭和49年に稲垣義明先生が初代教授となつて以来私で3代目になります。

私は、昭和57年に東京大学医学部を卒業した後、2年間の臨床研修後、当時高久史磨先生(現自治医科大学学長)が主宰していた同大医学部内科学第三講座に

臨床講義を聴いた。独特のドイツ語をまじえて、理解は難しかった。その手術は芸術といわれたが学生には分からなかった。趣味は鮎釣りや針その他も自作ののであるときいた。教室には奥田稔がいた。

入局し、当時矢崎義雄先生(前東大内科学第三講座教授、現国立国際医療センター総長)がチーフであった循環器グループに所属しました。私の入局した頃は、東大も旧講座制であり、一内から四内までのいわゆるナンバー内科は多くのグループよりなっていました。当時は第二内科が循環器・高血圧を専門とする人が多く、100人余りいたのに対し、第三内科は血液、糖尿病が中心で、循環器グループはわずか数人の小所帯でした。ですから入局して数年は病棟で研修医の指導にあたりながらも、毎日心臓カテーターやエコー、運動負荷などに追われる日々でした。研究に関しては、初めの2

年間心筋を構成する収縮タンパク分子の生化学的な研究をした後、分子生物学的手法を用いて、心不全の発症機序に関する研究を行いました。しかし心臓の病態形成の機序を知るには、まず心臓が形成される機序を理解する必要があるのではないかと、心臓の発生・分化の研究をするために平成元年、米国ハーバード大学に留学しました。4年間の留学中に幸い世界で最初に心臓発生のキーとなる転写因子を単離することができました。帰国後もこの分子を中心に心臓の発生・再生の研究と主に遺伝子改変マウスを使った心不全の発症機序の研究を行っています。千葉大学医学部内科学第三講座は前任の増田先生の、循環器の画像診断に関する研究を中心に行っていました。その結果、我が国でも有数の循環器画像診断グループが形成されていま

臓器制御外科学教室

宮崎

勝(昭50)



本年4月1日付けで千葉大学の大学院重点化に伴い講座名が変更された臓器制御外科学教室(旧外科学第一講座)の教授ならびに医学部附属病院第一外科長を

す。今後は、画像に関する研究を益々発展させるとともに、それ以外に心臓カテーター、エコー、不整脈、基礎研究グループを育成し、全てのグループを世界で有数のものに育てたいと考えております。もちろん、臨床教室として臨床のレベルを向上させることが前提です。そのためにも卒前・卒後の教育を充実させることが重要だと考えています。そして最終的には、世界に先がけて高度先進医療を推進していきたいと考えています。また多くの同窓会の方がいらっしゃる千葉県内の他の病院や診療所と共同で臨床疫学研究を行い、千葉よりEBCを確立してまいりたいとも考えております。

拝命させて頂きました。私は昭和50年に千葉大学医学部を卒業し、この第一外科教室(当時、伊藤健次郎教授が主宰)に入局しました。その後奥井勝二元教授、中島伸之前教授のもとで、一般外科特に消化器外科を中心に臨床、研究に取り組んで参りましたが、奥井元教授には消化器外科の中でも肝胆脾外科を積極的に自分自身の専門領域として仕事をさせていただくチャンス頂き、また中島前教授には外科教室のリーダーとしての姿勢を学ばせていただいたことを深く感謝申し上げます。また入局早々の駆け出しの外科医に外科学のアカデミズムの大切さ、面白さを直接お教え頂いた藤本茂元助教にはその後の私の外科医としての生き方の方向性を決めるきっかけを作っていただいたこと、その他多くの教室の先輩方に臨床、研究を通じてお世話になりましたが、この誌上をお借りしその諸先輩方に厚く感謝申し上げます。この教室の医学部での講座名は代わりましたが、教室主宰者としての教授は私で第八代目になります。現在私共の教室には研修出張者を含め約150名が在籍しておりますが、私はその責任者

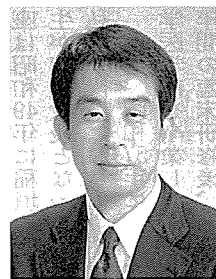
としてアカデミズムを求め、姿勢を常に忘れないヒューマニティー溢れる有能な外科医を一人でも多く育てていきたいと願っております。そのためには、私自身を含め大学に籍を置くすべての教室員が自分自身を常に厳しく自己評価し、大学人としての臨床外科医のあり方を追求して行くべきであろうと考えております。臨床医として生涯とも生きて行くいくであろう私共、臨床の外科教室員にとって、将来どのような方向に進もうとも先に述べた真のAcademy Surgeonとしての姿勢を若いうちに学び、その心を植え付けさせることが医師としての生涯を通じてのそのあり方、生き方に真のプライドを持ち続けられることになるものと確信しております。昨今一部マスコミ等で医師、医療のあり方が厳しく問われておりますが、その真偽、是非はともかく、多くの卒業したての若い医師を迎え彼等の教育を担っている大学の教室としての役割はその意味からも極めて重要な物があることと認識しており、先に述べた方針で若い教室員を大切に育てて行きたいと考えております。学び舎としての大学、新たな知見を世界に

向け発信出来る大学、最先端の医療内容を患者さんに提供できる大学、そのような大学の臨床教室としての責任、役割を充分に果たしていく為に、私自身教室員とともに精一杯頑張っております。そして一人でも多くの真に優秀な外科医を本教室から輩出したいと願っております。大学に身を置く我々が常にそのような姿勢を持ち続けていく事で、その学び舎から育って行く医師が地域医療においても患者さんから尊敬されつつ医療に貢献し得るような、医師としての真のプライドを獲得できることになるものと思っております。そのためには、るの は な 同窓会の多くの方々並びに学内の他教室の方々からの強い御支援、御指導を今後いっそう賜りたくお願い申し上げます次第です。



臨床遺伝子応用医学教室

武城 英明 (昭58)



平成13年4月1日付で千葉大学大学院医学研究院研究領域であります臨床遺伝子応用医学(M6)を担当させていただきましたこととなりました。本研究領域は、大学院大学への移行とともに、先端応用医学講座に所属しトランスレーショナルリサーチを推進する目的で新しく設立されました。このような大学院大学にともなう新たな研究領域を担当させていただくことは、きわめて名誉であるとともに、今後の大学改革のもとに大学院大学の発展が望まれる上で、責任の重大さに身が引き締まる思いです。

私は、昭和58年に本学を卒業した後、内科学第二講座に入学しました。3年間の内科研修の後、当時の主任教授吉田尚先生、齋藤康先生(現主任教授)のご高配で京都大学大学院医学教室(故沼正作教授)で医学研究を学ぶ機会を与えていただき、特に神経伝達物質受容体に関する機能解析について分子生物学的研究に従事しました。学位取得後、吉田尚、齋藤康先生に大学院で引き続き動脈硬化の臨床および基礎研究を行う機会を与えていただき、さっそく高脂血症の病態に関する研究に着手しました。その間、白井厚治先生(現東邦大学佐倉病院教授)に、家族性高コレステロール血症の患者さんの診療と治療法について一から教えていただき、また多くの諸先輩の先生方にご指導を賜りまして本疾患の病因でありますリポ蛋白受容体に関する分子生物学的研究を進めることができました。その後、3年間ウィーン大学バイオセンターで、モデル動物を用いて受容体ファミリーの機能解析を行い、帰国後、齋藤康先生のご指導のもと研究室で新たなファミリー遺伝子の同定に成功することができました。最近の成績から、LDL受容体ファミリーが、細胞増殖や遊走機能に関わるものと明らかとなり、高脂血症に加え、動脈硬化、悪性疾患、神経疾患等様々な病態を修飾すると考えております。

まず、一方、高コレステロール血症に加えて、動脈硬化の発症因子に関する疫学調査を通じて、ゲノム解析を基盤にした動脈硬化治療法の確立を目指しています。今後、新しくつくられた研究領域として、これまで

分子統合生理学教室

桑木 共之 (東大昭56)



平成13年4月1日付で新たに設置された先端応用医学講座分子統合生理学教室担当教授を拝命いたしました。旧所属(生理学第二講座)を改称した部門である高次脳機能学講座自律機能生理学教室担当も兼任させていただきましたことになりました。後者は福田康一郎教授(医学研究院長兼務)を主任教授とし、私はお手伝いをさせて頂くことになりました。

の研究を進展させるとともに、千葉大学大学院におけるトランスレーショナルリサーチに貢献すべく全力を尽くす決意であります。同窓の諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

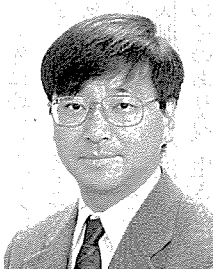
私は昭和56年に東京大学理学部生物化学科を卒業し、藤沢薬品工業に入社、研究生活をスタートしました。血管薬理部門に配属されて早々、「静脈血管の薬物感受性の部位差はその発生の由来を反映している」という名大薬理・重井達朗先生の論文に接し、全ての細胞に共通した普遍的原理を追求するという理学部で培われた態度だけではとうてい生物の全体像は理解できないと痛感しました。そこで、筑波大学大学院医科学修士課程に国内留学して医学生物学の各論を学ぶ機会を得ました。筑波ではまた、臓器個別の事情を案配しながらも全体として統一のとれた個体であるために神経が果たしている役割を研究する、という統合生理学的視点を得ることが出来ました。その後、筑波での恩師である熊田衛先生が東大に転任の際に声をかけていただき、昭和63年に東京大学医学部助手に採用され、平成8年には本学生理学第二講座に講師として着任しました。

私は大学院生時代から、循環と呼吸の中枢神経性制御機構を研究して参りました。私が研究を始めた時点で、血圧と呼吸の情報を脳へ伝える神経と、脳から発して血管・心臓・横隔膜をドライブする神経、という入・出力路は既に明らかになっていました。それまではブラックボックスであった脳幹内での神経伝達経路も、この約20年間でかなり明らかになってきました。この解明にさきやながら貢献してきました。しかし、運動、覚醒・睡眠、情動、成長と老化、あるいは病態というような個体全般の状態の変化に応じて、その神経回路がどのようにfine-tuningされているのかは未だに明らかになっていません。そこで活躍している神経伝達物質・修飾物質に関する未知の点が多く残されています。これらの解明は、生物としての自己理解の欲求を満足させるだけでなく、QOLを持つ人間としての治療方法・健康増進の開発に繋がることと確信しています。幸いなことに、分子遺伝学の隆盛のお陰で遺伝子改変マウス等が利用できるようになり、学部学生時代には不明

にも想像すらしなかったですが、特定分子の役割をガラス管の中ではなくて個体で直接検証できるような時代になりました。担当部門名に表れていますように、分子的基盤から個体での統合まで幅広く貪欲に、上記の問いを解明していくことが今後の課題と考えています。しかしながら、上述のように私自身が雑多なバックグラウンドの元で研究を続けてきました。とにかく研究が好きという一点以外はこだわりのないオープンな研究室にして、学生諸氏と切磋琢磨していきたいと考えています。何分にも新しい研究室です。同窓会の皆様方の暖かいご支援とご指導を心からお願い申し上げます。

免疫細胞医学教室

中山 俊憲 (山口大昭59)



平成13年4月より千葉大学の機構改革によって新しく作られた、大学院医学研究院、先端応用医学講座免疫細胞医学教室の教授に就任致しました。いわゆる探索的臨床研究(broad research)を推進する講座です。癌、移植、アレルギーなどを標的として、免疫細胞を使った新しい治療法を開発するといった研究領域になります。あのはな同窓会の会員の方々とはいあまり面識がありませんので、この紙面をお借り

して私の略歴、研究内容を簡単に紹介させていただきます。私は山口大学医学部を昭和59年に卒業後、すぐに、東京大学医学部免疫学教室の大学院生になりました。当時この教室は、千葉大学医学部出身の多田富雄先生が教授をしておられ、多田先生とは、大学院の時から助手・助教授と合計すると10年ほど一緒に仕事をさせて頂いていたことになりました。平成10年4月から、千葉大学の免疫発生学教室の助教授として、谷口克教授の研究室で医学部及び大学院の教育指導と免疫アレルギー研究を行ってまいりました。私が免疫学に興味を持った理由は、医学部の学

生のときに免疫関係の講義を聴いてもよく分からないし、Journal of Immunologyという雑誌は、毎月非常に分厚いところを見ると、まだまだよく分かっていない研究分野らしく、しかし病原微生物に対する生体防御機構は非常に大切そうだし、といったかなり漠然としたものでした。

現在の私の研究内容について少し紹介致します。末梢の機能性ヘルパーT細胞は、IL-2やIFN- γ を主に産生するTh1細胞とIL-4、IL-5、IL-13を産生するTh2細胞に分けることができ、これらはそれぞれ違った局面で免疫反応をコントロールしています。また、Th1/Th2細胞のバランスは生体にとって非常に重要で、これが崩れると様々な病気が起こると言われています。たとえば、Th2優位の状態はアトピーや喘息、花粉症などのアレルギー疾患の発症と密接に関係がありますし、I型糖尿病や甲状腺炎などの臓器特異的自己免疫疾患ではTh1優位になっていると考えられています。このTh1/Th2細胞の分化制御機構について、細胞内シグナル伝達機構、転写調節、さらにはクロマチンレベルでの解析を行っ

ています。

これまでと同様、免疫の研究を通じて若い大学院生たちと多くの楽しみを共有したいと思っています。また、これからは免疫細胞治療の研究にも力を入れていきたいと考えています。この分野の研究では臨床の先生方との密接な連携が必須

教育学部養護教育講座

杉田 克生 (昭54)



多くの同窓の先生方に当課程学生のご指導をいただいております。

私は昭和54年に千葉大学医学部を卒業後、中島博徳教授が主催される小児科学教室に入局いたしました。卒業後2年目に研修を行い

平成13年4月1日付けで末吉貫爾教授(昭36)の後任として、千葉大学教育学部基礎医科学(現在は大講部基幹導入により養護教育)の教授を拝命いたしました。私が担当致します講座は養護教諭養成を主な職務としております。従来基礎医科学、臨床医科学、教育保健学の3つの教室に分けられておりました。医科学一般の教育には、歴代千葉大学医学部医局出身の先生方で担われてきました。また非常勤講師による講義、千葉大学医学部附属病院や県下各保健所での実習などで、

です。多くの臨床の先生方と密度の濃い共同研究ができればと思っておりますので、何卒宜しくお願い致します。その他、詳しい研究内容のことなどにつきましては、私たちのホームページをご覧ください。(http://www.n.chiba-u.ac.jp/class/meneki/index.html)

は、中島教授のお薦めで、当時小児神経学のメッカであった東京女子医科大学小児科の福山幸夫教授に師事し、多くの小児神経疾患について診断と治療法について学びました。その間に得た知己は、現在全国各病院で活躍されており、私の宝の一つです。

再度千葉大学へ帰局後は、小児神経グループのなかで、周生期脳障害の画像解析や発達診断を行ってきました。一方、成長発達障害を呈するCockayne症候群を対象にDNA修復異常と神経障害との関連を、第2生化学講座の鈴木信夫先生(現環境影響生化学教室教授)と共同で進めました。昭和62年には、英国ロンドン大学 Hammersmith 病院 (Dubowitz教授、Wigglesworth教授)で、新生児神経学や周生期病理学を学びました。帰国後は、国立精神神経センター神経研究所高嶋幸男部長(現、同研究所長)のご指導で、厚生科学長寿科学研究事業に参加させていただき、早発老化を呈するCockayne症候群の細胞遺伝学研究を進めてきました。

発達と老化は鏡面像の関係があり、新美仁男教授の研究体制のもと、小児科医

として両者の面より細胞生

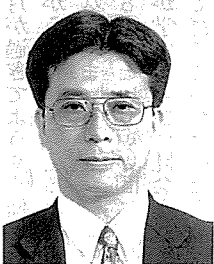
Dr. Jeggoと、Human Frontier Science Programの中、ヒト重症免疫不全症由来細胞のX線応答機構の解析を行っており、現在も新しい知見を得て研究を進展させるとともに、学生への環境教育に役立てております。

平成9年4月より小児科同門の上原すず子教授の後任として教育学部臨床医科学教室に着任しました。これまでに進んできた経験から、実例を通しての研究・教育は学生にも説得力があり、研究者が教育する教科教育の必要性を改めて痛感する所です。現千葉大学小児病態学教室の河野陽一教授は従来より医学教育にも力を注がれておられます。私も文部科学教官の一人として、自らの「教育能力」の向上に今後努めて参りたいと考えます。一方、恩師中島博徳先生は退官にあたり、新たに「健康小児科学」教育の必要性を提唱さ

れておられました。発達生理学を基礎とした「健康増進のための」小児科学や小児保健学の教育法の開発も考えていきたいと思っています。さらに、最近問題視されてきた学習障害や注意欠陥・

奈良県立医科大学内科学第二講座

木村 弘 (金沢大昭53)



このたび、平成13年4月1日付けで、奈良県立医科大学内科学第二講座教授を拝命いたしました。栗山喬之教授はじめ学内の多くの先生方には、就任の決定の際、ならびにその後もご支援や暖かいお言葉を頂戴し改めて感謝申し上げます。同時に、これまでご指導をいただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。

私は、昭和53年に金沢大学医学部を卒業し、同年4月より、直ちに千葉大学医学部附属病院にて研修を開始いたしました。2年間の研修医生活の後、昭和55年に渡辺昌平教授が主宰される肺病研究施設第二臨床研究部門(呼吸器内科)に入

局し、以来、渡辺教授、栗山教授に師事致しました。振り返りますと、2度の関連病院への出張と2年間の米国ペンシルベニア大学内科へのポスドクとしての留学期間を含め、卒業後23年間にわたって、千葉大学医学部にて臨床・研究・教育に取り組み場を与えていただきました。多くの師や諸先輩仲間にも恵まれたことと同時に、好きな学生教育に喜びを感じる場を与えていただいたことに改めて感謝申し上げます。研究・診療面では、呼吸不全、睡眠呼吸障害、肺循環障害を中心に取り組んできましたが、少しずつながらも研究を進められたのは、教室の多くの仲間のお陰でした。また、本田良行名誉教授、三方淳男名誉教授、福田康一郎教授はじめ、臨床各科の先生方からもご指導をいただき共同研究を

多動性障害の児童に対し、発達小児科学の観点からの診断や治療にも関わって参りたいと考えております。今後とも、同窓の皆様方の温かいご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

進めることができました。さらに、東京大学松島綱治教授、昭和大学本間生夫教授、東京都老人総合研究所白澤卓二博士らとの共同研究は、どれも、困難なものばかりでしたが、それに乗る越えた後のすがすがしさを大学院生とともに体験することができました。今後も、千葉大学とともに、これらの共同研究をさらに発展できることを願っております。

担当する内科学第二講座は、今秋より、附属病院外来では第二内科の看板を取り払い、呼吸器・感染症・血液内科を標榜することになりました。呼吸器と感染症と血液疾患患者を含めると、入院ベッドは計100余床の大部帯のため、教授回診には大変な準備を要します。月曜日になり回診の準備を始めたかと思ったら、あつという間に週末を迎えるというのが実感です。若葉マークをつけての身では当然のことかもしれません。

千葉大学から離れて奈良に赴任してみても、両大学間での、教室内外を取り巻く様々な環境の違いには時にとまどいを感じることもあります。改めて、千葉大学の自由な気風のすばらしさが身にしみて感じられます。

学生時代、奈良県立医科大で学主催の西医団体戦で、大学から10分ほどにある橿原神宮の弓道場で弓を引いたのが昨日のことのように思い出され、『光陰矢のごとし』を実感しております。時間をかけてでも、地道にこの奈良の地で優れた内科

長崎大学医学部附属病院医療情報部

本 多 正 幸 (千大理昭51)



医療情報部とともに20年

本年5月に、長崎大学医学部附属病院医療情報部の教授を拝命いたしました。千葉大学医療情報部在籍中は、大変お世話になり感謝申し上げます。千葉大学同窓会報への「教授就任挨拶」の寄稿を依頼されましたので、千葉大学在籍中のことや、長崎大学における抱負などを述べさせていただきます。

思い起こせば、1981年、今から20年前の1月に千葉高校の数学の先生をやめ、千葉大学医学部附属病院医療情報部の門をくぐりました。高校の先生という誰も

医・呼吸器内科専門医の育成と研究の発展のために、少しずつ前進できればと願っております。今後とも、るのは同窓会の諸先生方からのご指導・鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げます。

その姿を想像できるものですが、特に医療情報部という存在は当時、医療関係者でさえその存在自体を知者は少なかったと記憶しています。まして、どのような仕事をするのかなど暗模索の状態であったような気がします。そのような存在であった、医療情報部に對する不安を胸一杯に詰め、わが国では当時新しいコンピュータ言語であった「C」の必死に勉強させてもらいました。(MUMPSとは、米国のマサチューセツ総合病院で開発された、医療用のDBMSとプログラム言語が一体化したユニークな環境を提供したもので、システムの開発効率とDB効率を群を抜いて素晴らしいものでした。)

私が赴任してきてまもなくのこと、京都大学の平川

顕名教授が千葉大学の医療情報部、里村洋一講師を尋ねられ何やら握手しているではありませんか。私は何のこともやらずには分かります。医療情報部が正式に認められた(文部省から予算がついた)ということ、お祝いに來られたとのことでした。当時そんな「おおごと」なことであるという意識はありませんでしたが、今となっては、それは「すごいこと」だったと思えるようになりました。わが国で正式に医療情報部が生まれたのは千葉大学が初めてのことで、その後、旧帝国大学系の大学に続々と医療情報部が予算化されました。今年度(平成13年度)で、すべての42の国立大学病院に医療情報部が予算化されたことになっていきます。

千葉大学医療情報部は、教官組織としてはほぼ2人でやってまいりました。上司の里村先生は先代の医療情報学会の会長をお務めになり、電化カルテや医療用語の標準化でわが国をリードしてこられた著名な方でありました。その先生のもとで、私は病院情報システムの管理、開発を中心的な仕事とし、大学院時代に統計学を勉強したということ、

医学データの統計解析に関するコンサルテーションをこなして参りました。医療情報部の仕事は、診療科や中心部門などを縦糸としますと、コンピュータの技術を用いてその縦糸を横に紡いでいく仕事である、と表現された先輩研究者があられました。私もまさにそれと同様の思いであり、既成の概念やシステムに囚われず、時代に即応した新しい風を病院の隅々に送り続けることではないかと考えています。そのために最も重要なことは、職員の意識改革であると同時に職員が一体となつて同じ目標に進もうとする強い決意をどう構築していくかであると思っています。

長崎大学医療情報部に赴任して約2ヶ月半が過ぎたところです。長崎も千葉も大病院の規模や目標はそれほど大きく変わるところはない様に思いますが、長崎では病院内システム改革と同様に重要な課題があります。それは、離島医療支援、遠隔医療支援というテーマです。これはまさに離島病院、遠隔病院との人的連携が課題であるといえるでしょう。大病院に居る優秀な人的資源、知識をどうデリバリーするのか、

知識共有の仕掛けをどう作るのかということでしょう。私はまだまだ浅学ではありますが、目標に向かって少しずつでも前に進むように

信州大学医学部附属病院薬剤部

大 森

栄 (千大薬昭52)



昨年末(2000年12月16日)

に、信州大学教授、医学部附属病院薬剤部長に就任いたしました。年末に加えて世紀末といった慌ただしい時期の赴任でしたが、8カ月が過ぎてようやく僅かながらも周りが見えるようになってまいりました。この8カ月という短い間に、私が学生ならびに社会人として育てていただいた千葉大学の有り難さを実感いたしました。私が千葉大学薬学部に入學したのは、1973年でしたが、その当時は学生運動の残り火が燦々としており、薬学部の渡り廊下をヘルメットをかぶった闘士たちが走っていたような時期でした。それから28年の間、千葉大学に色々な意味でお世話になって来ました。

職員となりましてからは、薬学部時代には故・北川晴雄教授(薬学部薬物学研究室)、金久保好男教授(病院薬学研究室)のもとで研究者としてあるべき姿を教えていただきました。金久保好男教授が医学部附属病院薬剤部教授でありました縁もあつたのでしょうか、1993年より後任の北田光一教授の下で助教授として医学部附属病院にお世話になり、臨床の勉強をさせていただく機会を得ることができました。それから7年7カ月の間、医学部附属病院で、それまで欠けていた臨床についての教えを、それは多くの先生方に御教授いただきました。病院での臨床医を始めたとした医療従事者としての業務連携等についての経験は現在の私の病院での業務を考えて行く際の基盤となつております。一方、医学部の一部を使わせていただいていた薬剤部試験室の

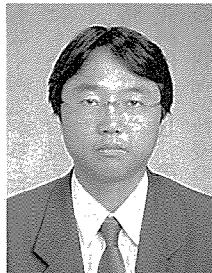
整備につきましては、医学部の事務の方々にもお世話になり充実させることができました。加えて、薬剤部試験室の両側におられました泌尿器科の島崎淳教授、伊藤晴夫教授ならびに微生物学第二の野田公俊教授には、最初から最後まで、学生を始めとしたしまして色々と御迷惑をおかけいたしました。そこでの研究体制の中での業績がこの度の人事にも結びついたのではと感謝いたしております。こちらに参りましてからも、貴重な先輩であります重松秀一教授(病理学、昭44)には会議の度にお声を掛けていただいております、離れて思う故郷に対する感謝の気持ちで一杯になります。

信州大学医学部附属病院は、680床と病床数が千葉大学の約8割程度の規模の病院であります。長野県の医療の中核として多大なる貢献をいたしているところです。生体肝移植は定期的に行われており、遺伝子診療部による遺伝医学推進など高度医療推進には極めて積極的です。私も薬剤部長としてその手助けの一部でもできればと考え、部内の組織づくりから開始いたしました。研究につきましても、これまでの研究はもと

より大切ではありますが、これから十数年過ごすことになるであろう信州大学には薬学部がありませんので、新たな薬学的研究課題に取り組んで行きたいと思っ

帝京大学医学部泌尿器科

正井基之(昭57)



ました。帝京大学医学部附属市原病院には平成6年4月に当時泌尿器科の伊藤晴夫教授(現在千葉大学附属病院院長)のもと、助教として赴任いたしました。

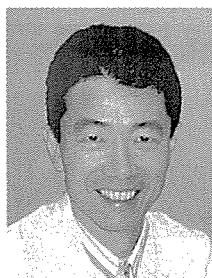
初秋の候、皆様いかが御過ごしでしょうか。私は平成13年4月1日をもち、帝京大学泌尿器科教授(勤務地帝京大学医学部附属市原病院)に昇任いたしましたので、ゐのはな同窓会誌の紙面をお借りし、皆様にご報告申し上げます。私は昭和57年3月千葉大学医学部を卒業後、島崎淳教授の主催される泌尿器科学教室に入局しました。千葉大学泌尿器科での研修後、君津中央病院、沼津市立病院、済生会宇都宮病院にて勤務し、昭和63年に千葉大学に戻りました。千葉大学に戻った後は、島崎淳教授の指導により前立腺癌の研究を行い、臨床的には前立腺癌および尿路結石を専門に行ってい

ております。欲張りかもしれませんが、この環境の中で一人でも多くの薬学研究者を育てて行きたいものです。防に力を注いでいます。両疾患とも本邦で増加傾向の著しい疾患です。地域医療に貢献するとともに、研究面においても指導的立場に立っていただけるよう努力していきたいと思っております。当院では教授昇任と同時に副院長補佐を拝命し、めまぐるしく変わる医療制度、厳しい医療環境に対応すべく、病棟の構造改革に頭を悩ませている毎日です。現在、当院は毎年多大な赤字をだしている状況にあり、院内における職員の教育および病院形態の再構築を行い、赤字の軽減を目指しているところです。当院では以前より医療連携がうまく行われていないと開業の先生方よりご指摘を受けており、紹介された先生方にはご不満をもたれた先生方も多いと思います。しかし本年4月より千葉大学出身の内山勝弘放射線科教授が総合医療相談部長として医療連携に力を入れており、当院でも医療連携の重要性に関する教育を通じて、紹介される先生方の立場を考えた診療を進めていく所存です。そのひとつは紹介された患者さんの満足が得られる医療を行うこと、もうひとつは紹介された先生方の満足が得られる連携を行

うことだと考えております。当院は市原市にある関係で、近くには千葉大学出身の先生方が多く、ゐのはな同窓会会員の先生方のご支援を

東邦大学医学部附属佐倉病院眼科

山本修一(昭58)



平成13年7月1日付で、東邦大学医学部教授に昇任し、佐倉病院眼科教室を担当させて頂く事となりました。

東邦大学佐倉病院は平成3年の開院で、この秋に10周年を迎えます。眼科の初代教授には網膜硝子体手術ですでに名声を上げていた竹内忍教授(東邦大卒)が就任し、開院当初は医局員が教授を含め3人という野戦病院状態で診療をスタートしました。しかし竹内教授の下へ日本全国から患者が集まり、手術件数はうなぎのぼりに増え続け、昨年はついに年間1600件を達成するに至りました。また医局員も増え、現在では14、5名が常勤で診療しております。その竹内教授は本年4

受けなければ、成り立たない状況は明らかです。今後より一層のご支援を賜れるよう御願ひ申し上げます。

月に東邦大学大橋病院眼科教授に移籍となり、その後任として私が佐倉病院眼科をお任せ頂くこととなった次第です。

私は、昭和58年に本学を卒業、眼科(当時、石川清教授、59年より安達恵美子教授)に入局いたしました。昭和60年、大学院に進学し最初の2年間は、免疫学教室に在籍(住み込み?)させていただき、谷口克教授、徳久剛史教授や直接のオーベンであった住田孝之先生(現・筑波大教授)など多くの先生方に御指導いただき、お世話になりました。

結局、学位は眼科の視覚電気生理で取得し、平成2年、窪田靖夫教授(昭28)の富山医科薬科大学眼科に講師として赴任いたしました。翌3年から5年にかけては、米国コンビビア大学ハークネス眼研究所に留学させていただき、網膜移植の研究を行いました。この研究は当時始まったばかり

で、難治性の網膜疾患に対する夢の治療法として注目を集め、米国ではNew York Timesなどの一般紙にまで取り上げられていたが、その後は多くの難問に直面し、未だ臨床応用には至っておりません。

平成9年1月、安達教授のお口添えにより東邦大学佐倉病院眼科に助教として赴任いたしました。まだ野戦病院の名残はあるものの眼科の医局員も増えており、大学病院としての機能を充実させたいとの竹内教授の意向を受け、網膜硝子体手術のみならず、各種網膜疾患の内科的治療や、臨床研究に携わってまいりました。

昨今、私立医大を取り巻く環境はきわめて厳しく、主たる財源である学納金、医療収入、補助金のいずれもが増加を見込めないため、東邦大学でも教員定員の削減を柱とする機構改革が教授会でもしばしば議論されています。佐倉病院は分院のため、臨床だけやって稼いでいればよいとの雰囲気ですが、富岡玖夫教授(昭39)や白井厚治教授(昭48)の率いる内科グループは基礎研究も精力的に行っていますが、それ以外は皆無に等しく、かという眼科

も立て込んだ手術の合間を縫って、研究に関心の薄い若い人たちが叱咤激励しながら、些細なネタで英語の論文をちまちまと書いている状況です。昨年より副院長を務めている白井教授の奔走により、ようやく動物実験施設の建設が本格化しつつありますので、手術一

防衛医科大学校産科婦人科学講座

菊池 義公 (昭41)



此の度、平成13年4月1日付けで、防衛医科大学校産科婦人科学講座主任教授を拝命致しました。

防衛医科大学校は創設以来28年を経過しようとしており、変革に向けた新しい動きが始まるうとしております。産科婦人科学講座は初代教授加藤宏一(昭23)先生、二代目教授永田一郎(昭35)先生に続き、私で三代目となります。また病院分娩部初代教授は小林充尚(昭34)先生、二代目は永田一郎先生が兼任され、三代目は私が兼任しております。

辺倒の医局員の意識を少しずつ研究方向にも向けていこうと考えております。浅学非才な身ではありませんが、より活力のある教室作りに努力してまいる所存です。ゐのはな同窓会の諸先生方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

私は昭和41年に千葉大学医学部を卒業し、千葉大学医学部附属病院での1年間のインターンを終え、昭和42年に千葉大学医学部産科婦人科学教室に入局致しました。その当時は御園生雄三教授が健在でしたが、まもなく病気がちとなり医局にもあまりお見えにならなくなっていた頃でした。同時に千葉大学大学院医学研究科に入学し、第一生化学の三浦義彰教授のもとで子宮筋腫の酵素的な研究を行っておりましたが、当時の手法では子宮筋腫と正常子宮筋との間に酵素的変化は見ることが出来ずに困っていました。文献をあさっている間に酵素のアイソザイムパターンをみる方法があるのを知り、当時国立がんセンター研究所生化学部長

であられました杉村隆(現国立がんセンター名誉総長)先生のもとに教えを乞うべく訪ねましたところ、1、2ヶ月ではなく最低一年間は来るようにといわれ、先生のもとで約一年半研究することが出来、論文はCancerに acceptされ、学位を取りました。この1年半の研究生活が後々の私の礎となりました。

その後私は昭和47年には千葉大学医学部産科婦人科学教室に戻り、臨床面では当時講師でおられた高見澤裕吉(昭27)先生に師事し、絨毛癌の臨床研究と手術について教えを受けました。昭和50年5月助手となり、昭和54年1月からセントルイスにあるワシントン大学に留学、昭和54年7月からはバーミングハムにあるアラバマ大学微生物学教室で主として腫瘍細胞の培養と腫瘍免疫について研究を行い、その一部はCancer Res等に掲載されております。昭和56年2月から防衛医科大学校産科婦人科学講座講師として赴任し、平成元年7月に助教授となり、平成13年4月1日より主任教授となり、現在に至っております。



るの は な 同 窓 会 賞 受賞者の言葉

さに変革の時期にきているといっていると思います。医学界もまた新しい波にもまれようとしております。この様な改革の時期には何よりもスピードが求められると思っています。大学での医学教育、研究、診療に対してこれまで以上のスピードと正確さと厳しさが求め

られていると思っております。BPMにもとづいた医療のみでなく、同時に patient's satisfactionが重要であると思っています。どうぞゐのはな同窓会の諸先生方には今後益々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



功労賞
ブラジル連邦共和国・サンパウロ州立カンピーナス大学教授
アテマール・ヤマナカ

私がこの名誉ある国際賞を頂けるとのご連絡があり、私自身考えた事がありませんでしたので言葉では表せない程驚き、今までお世話になった諸先生に心から感謝しております。

このような賞を頂けることは私はブラジル生まれですが、今まで日本人的教育を受けて来たので感無量です。今回、賞を頂けるのは千葉大内科(奥田、大藤、税所教授、土屋、木村先生)で1983、86年に諸先生に超音波および内視鏡の診断・治療の最新技術を学ぶ事が出来たためと考

えております。私はブラジルに帰国後、千葉大学で学んだ技術をウニカンブ大学およびカトリック大学で教え始めました。日本とブラジルでは医療のシステムが違い、内科医が超音波をやる事について、放射線科の先生方よりクレームがきました。しかし、諦めることなく続けたことで、私が初めて内科医として超音波をする事が認められ、現在はブラジル超音波学会とブラジル放射線学会のメンバーになり、頑張っています。

また、当時ブラジル・カンピーナス大学での内視鏡は側視が主流でしたが、千葉で学んだ直視法を同大学に導入致しました。更に、日本で学んだ技術をブラジル全土に技術移転を行うため、JICAのプロジェクトを起こし、ブラジル全土の内科および外科医が研修にきています。その際に、千葉大学第一内科および富山県立大学第三内科と第二外科の先生方には大変にお世話になりました。現在も同技術を更に広げるためにJCTP(第三国研修)を行い、ラテンアメリカおよびポルトガル語圏のアフリカ諸国に対し研修コースを通して技術移転を行っ

ております。

その他、日本での忘れられない思い出は84年研修員として来日していたナンシーと結婚(仲人税所教授、狩谷先生)、妻ナンシーもまた千葉大学医学部教授若新先生の教室で基礎研究に従事しました。

また、1997年にはJICAプロジェクト・フェーズⅡでJDSを加え、千葉大学真菌医学研究センターの宮治誠教授に加わって頂きました。

このように、私は千葉大学医学部との関係が深く、多くの先生方に支えて頂き、現在もその事を忘れることなく頑張っております。

この受賞を期に更に日伯の架け橋となり、人々の健康を守るように頑張ろうと思っております。

医事評論家

行天良雄(専24)



よく云えば先見性だが、実際は敗戦の大混乱期が生んだ運命である。神風特攻が現実のものであり、一方の一中一高大蔵省の夢が破

れた何人かの学友がいた。

東京も千葉も焼野原であり、学校は長野県の伊那谷に疎開したが引越しの途中で敗戦になり、それこそ別の意味で、明日が全く分らなかった。

家が横浜であり、焼跡の整理などしていた時、8月末に占領軍がニューグランドホテルに入ってきた。2週間前迄鬼畜米英と云われていた占領軍を見に行き、そこでボーイとしてリクルートされた。報酬はお金以上に高価値だったチョコレートやクッキーであったが、何より、たかが敗戦国のボーイを人間として扱ってくれた占領先遣部隊のエリート達とのふれ合いが、私の道をかえた。軍の病院ではじめて見た近代医療と、ペニシリンなどの抗生物質の夢

そのものの威力に、一も二もなく傾倒した。50年にはじまった朝鮮戦争を目前にして上司の大半が本国に転属させられてしまった。彼等は異口同音に、この廃墟を復興させる為には民政を充実し、医療の社会化を進めろ、その為メディアを活用しろ、と示唆してくれた。

50年以後JDSですごした半世紀は、凡てが激動し続けた。ラジオからTV、そしてカラーTVの流れは

今やデジタルと云う情報メディアに変容した。

はじめ国内で、結核と精神そしてハンセン病にとりくんできたが、在郷軍人病と云われた肺炎にはじまり、HIVの謎を追ってアトランタに通い、心臓移植で南アにとび、バーナードに

OPの説明をうけたり、イギリスではエドワードに体外受精の夢を伺い、ウィラードからクロインの信念など熱っぽく語られた。書ききれない思い出を手繰るときりがない。しかし凡ては人との出会いであった。その道をすすめて下さった鈴木次郎先生、香月秀雄先生、そして武見太郎先生やら、これも又枚舉に暇がない半生だった。

敗戦そして、こんどくる超高齢社会突入と云う、時代を決定的に変えてゆく流れの中で、ただその中を駆け抜けてきた私は、云うなれば、趣味道楽みたいなものである。

そんな話に同窓会賞が与えられるなど思ってもみなかったが、これも又人とのふれ合いの賜と思ひ、人間万事塞翁が馬、の故事をかみしめている。

ありがとうございます。

横浜市病院協合理事

富田 裕(昭30)



この度るのはな同窓会賞を頂き大変光栄に思っておりますが、嬉しいやらはがゆいやらというのが本音の所です。多くの同業の諸先生が夫々地域に貢献されている中で、私が受賞とは、まあこれらの方々を代表して頂いたのではと思っております。

私が横浜金沢区に金沢病院を開設したのは昭和43年ですから、もう33年になります。当時、私は長らく在籍した大学を離れ、若気の至り、肩ひじを張って生きていたように思います。医師としていかに生きべきか、考えなかつたわけではあり

ませんでしたが、自分の腕を過信し、華々しく学会へデビューしたことが忘れられず大学流儀(今はそんなことはないでしょう)を貫こうとした自身に、今思いかえして冷や汗が流れる思いです。

医師が地域の中で生きることは当然のことです、地域の人々との交流こそ医療に携わる者としての本当の幸せとつくづく考えさせられています。

療に携わる者としての本当の幸せとつくづく考えさせられています。

昨今医師会では、ビル診問題が盛んに論ぜられています。横浜の様な都会では、診療所は繁華街のビルの中、自宅は離れた郊外にというのが普通となってきたいます。従って開業医の諸君の地域密着度が薄れ、夜間救急患者に対応出来ないことが問題となっています。こんなことから私共の様な中規模病院、地域中核病院の存在がより重要となって来

ています。

又、広い意味での医療の対応が求められています。高齢化はその最たるものです。私共は、医療と福祉の合体を考え、保健から介護迄の体制を作っています。健診センター、病院、老健施設、訪問看護、訪問介護ステーションを開設し、文字通り揺りかごから墓場迄の流れを地域に作り、金沢区を医療と福祉のモデル地域にしたいなどと大それた考えを持っています。

大学が高度医療ばかりでなく、地域医療、福祉に、より関心を示して下されば大変有難いと思っております。

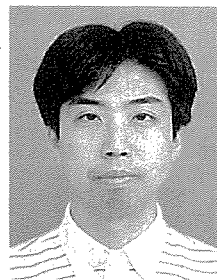
とりとめのない思いを申し述べましたが、一言受賞

への御礼の言葉とさせて頂きます。

学術賞

千葉大助手

清水栄司(平2)



2001年という新世紀に、名誉あるのはな同窓会賞学術賞を賜り、心から御礼申し上げます。私は、平成2年に千葉大を卒業後、佐藤甫夫教授(現名誉教授)の主催される精神医学教室に入局させていただきました。平成5年、大学院(内科系精神医学)進学時から、分子生物学とウィルスへの興味から、清水文七教授(現名誉教授)の第一微生物学教室にてご指導賜りました。この時、白澤浩先生(現教授)より、科学的なものの考え方から実験技術まで直接ご教授いただく機会に恵まれました。大学院では、培養細胞を用いた神経細胞の分化に関する癌抑制遺伝子の研究、人間の性格と遺伝子多型の研究などに加えて、先の留子の契機にもなった精神分裂病の動物モデルを用いた発現変化遺伝子の

クロニングなどをご指導頂きました。その後、教室の諸先生方のご好意によりまして、米国東海岸ニュージャージー州にあるプリンストン大学分子生物学科のJoe N. Tsien教授のもとへポストドクとして、留学させて頂きました。プリンストンで行った一連の「Zn-DNA受容体と学習・記憶」に関する研究の中で、遺伝子操作によってマウスの記憶力を高めることを示し、Nature誌に報告、また、「記憶の「獲得」だけでなく、「維持」にも海馬のNMDA受容体が重要であることを、ノックアウト技術の限界を超えた、正常な状態から遺伝子ノックアウトの状態に誘導するマウスを作成して示し、Science誌に発表しました。帰国後、教室の伊豫雅臣教授によりまして、本年4月から、千葉大学大学院助手を拝命させて頂きました。今後とも、

のはな同窓会の諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りながら、行動科学、神経科学、分子生物学を統合し、脳と精神の研究に邁進したい所存でありますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。末尾となりましたが、受賞挨拶の紙上をお借りしまして、ご指導頂きましたすべ

くお願い申し上げます。受賞挨拶の紙上をお借りしまして、ご指導頂きましたすべ

くローニングなどをご指導頂きました。その後、教室の諸先生方のご好意によりまして、米国東海岸ニュージャージー州にあるプリンストン大学分子生物学科のJoe N. Tsien教授のもとへポストドクとして、留学させて頂きました。プリンストンで行った一連の「Zn-DNA受容体と学習・記憶」に関する研究の中で、遺伝子操作によってマウスの記憶力を高めることを示し、Nature誌に報告、また、「記憶の「獲得」だけでなく、「維持」にも海馬のNMDA受容体が重要であることを、ノックアウト技術の限界を超えた、正常な状態から遺伝子ノックアウトの状態に誘導するマウスを作成して示し、Science誌に発表しました。帰国後、教室の伊豫雅臣教授によりまして、本年4月から、千葉大学大学院助手を拝命させて頂きました。今後とも、

ての先生方に感謝させてい
ただきたく存じ上げます。

~~~~~

東京都老人総合研究所分子  
遺伝学部門

# 白澤卓二(昭57)



このたびは、名誉あるの  
のはな同窓会賞を頂き、心  
からお礼申し上げます。

私は、昭和57年に千葉大  
学を卒業後呼吸器内科に入  
局し、渡邊昌平教授のもと  
で、臨床研修を修めました。  
昭和61年に研究のために、  
免疫学教室の谷口先生の研  
究室に所属し、平成2年に  
大学院を修了しました。大  
学院の間に、ドイツのケル  
ン大学遺伝学研究所のKla  
us Ralowsky教授のもと  
で分子免疫学を勉強させて  
いただきました。日本に戻っ  
てからは、現在感染症研究  
所の竹森部長と共に、当時  
目黒駅前にあった、旧国立  
予防衛生研究所の免疫部門  
に、分子免疫学研究室を新  
たにセットアップする機会  
に恵まれました。

平成2年に東京都老人総  
合研究所の分子病理部門に  
移り、病理学を学びながら

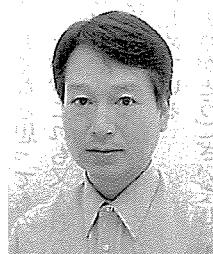
分子生物学の研究を続行し  
ました。病理部門に平成9  
年まで所属し、分子病理部  
門の丸山部長と免疫病理学  
部門の広川部長に病理学を  
教えていただきました。こ  
の当時より、アルツハイマー  
病の仕事を開始し、研究内  
容も免疫学から神経科学に  
転向しました。

平成10年に分子遺伝学部  
門の室長として新たな研究  
室をスタートする機会に恵  
まれ、線虫の遺伝学を用い  
た寿命研究をスタートし、  
現在に至っています。この  
間に千葉大学、呼吸器内科  
の栗山教授、第2内科の斉  
藤教授、耳鼻科の今野教授  
より大学院生を派遣してい  
ただき、優秀な千葉の卒業  
生と共に現在の研究室を発  
展させることができました。  
改めて、この場をかりて感  
謝の意を表したいと思いま  
す。

現在の研究テーマは、ア  
ルツハイマー病の分子生物  
学と寿命関連遺伝子に関す  
る分子遺伝学的研究の2つ  
の研究テーマです。今回の  
受賞を励みに、いっそうの  
努力を重ねる所存ですので、  
今後ともご指導、ご鞭撻の  
程よろしくお願い申しあげ  
ます。

## 千葉大助手

### 高野博之(昭62)



この度は、るのはな同窓  
会賞学術賞をいただき、心  
より感謝申し上げます。私  
は昭和62年に千葉大学医学  
部を卒業後、第三内科に入  
局いたしました。故稲垣義  
明教授の御指導のもとで循  
環器病学の臨床研修を終え  
た後、平成6年に千葉大学  
大学院医学研究科へと進み  
ました。当時、循環器の基  
礎研究を希望していた私は、  
増田善昭教授(当時)、斉  
藤俊弘助教授の御配慮によ  
り、東京大学医学部第三内  
科の矢崎義雄教授(当時)  
が主宰される循環器グルー  
プの研究室で分子生物学の  
実験の手法を学ぶこととな  
りました。そこでは、心肥  
大時の細胞内シグナルに関  
する研究と筋細胞分化の分  
子機序の解明に関する研究  
の2つのテーマをいただき  
研究を始めました。私がお  
世話になった研究室は当時  
助手の小室一成先生がチー  
フをされており、実験の初  
歩からいろいろと御指導を  
受けました。2年半という

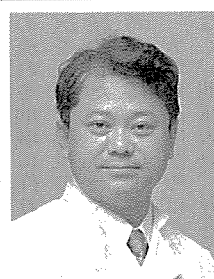
短い期間でしたが、幸い2  
つの論文を発表することが  
できました。千葉大学に戻っ  
てからは、増田教授の御理  
解と御尽力により新しく研  
究室を作っていたいただき、研  
究を継続することができま  
した。その後は心不全の病  
態解明と新たな治療法の開  
発をテーマにして現在も研  
究を続けております。今年  
の4月からは大学院大学へ  
の改革に伴い、講座の名称  
が循環器態医学となりま  
した。また東京大学で大変  
お世話になった小室先生が  
新しく教授に就任されてか  
らは、研究室は大幅に拡充し  
ました。今後、私達は臨床  
レベルをより一層向上させ  
ていくと共に、遺伝子治療  
や再生医療などを視野に入  
れた研究にも取り組んでい  
く予定です。

このように、今回の受賞  
は多くの先生方による御指  
導、御鞭撻の賜物と思っ  
ております。この場をお借り  
して深く感謝申し上げます。  
今回の受賞を大きな励みと  
して、今後も更に頑張っ  
て研究を続けていく所存で  
ございます。臨床医として、  
基礎研究により得られた結  
果を多くの患者さんへ還元  
していきたいと考えており  
ますので、今後とも御指導

御鞭撻の程よろしくお願  
い申し上げます。

## 千葉大講師

### 寺田修久(秋田大昭57)



この度は、名誉あるの  
のはな同窓会学術賞を頂き、  
大変光栄に感じております。  
私は昭和57年に秋田大学を  
卒業し、千葉大学昭和32年  
卒の戸川清教授が主宰する  
耳鼻咽喉科教室に入局しま  
した。以来、当時助教授で  
あった今野昭義(現千葉大  
耳鼻咽喉科教授)とともに  
鼻過敏症の病態解明とその  
制御を研究テーマの一つと  
して取り組んでまいりまし  
た。研究を始める動機は自  
分が鼻アレルギーに苦しみ、  
減感作療法、薬物治療が殆  
ど奏効せず、当時の鼻アレ  
ルギー治療に失望したこと  
にあります。特に鼻閉の改  
善がなく、日常生活におい  
て大きな不自由を感じまし  
た。私は鼻粘膜腫脹の病態  
を解明することにより、鼻  
閉を効率的に改善する新し  
い治療薬、物理療法が開発  
できないかと考え研究を始  
めました。その結果、好塩

基性細胞と同様に好酸球が  
鼻粘膜腫脹の発現に強く関  
与していること、そのメディ  
エーターとしてロイコトリ  
エンが重要であることを解  
明しました。好酸球浸潤や  
ロイコトリエンの作用を効  
率的に制御することにより  
これまでになく有効な治療  
薬の開発につながることが可  
能性を予測しましたが、実際  
に抗ロイコトリエン製剤が臨  
床的にも劇的に鼻閉を改善  
することが明らかになった  
ときには、これまでの基礎  
研究が多くの人に大きな福  
音をもたらすことに感激を  
覚えました。

最近では、環境医学に注  
目し、ディーゼル排気微粒  
子、ホルムアルデヒドが好  
酸球機能に与える影響につ  
いて検討し、最近30年間に  
おけるアレルギー疾患の増  
加の原因やシックハウス症  
候群における鼻過敏症状の  
発症機序について一部説明  
ができるようになりました。  
私は、基礎研究は臨床医学  
との関連を踏まえたものが  
望ましいと考え、常に臨床  
的問題意識に基づく実学と  
しての立場を保持したいと  
考えています。今回の受賞  
を励みとしてより一層の努  
力を重ねる一方、千葉大学  
のさらなる発展に少しでも  
お役に立ちたいと考えます。

## 千葉大助手

### 中島裕史(宮崎医大昭63)



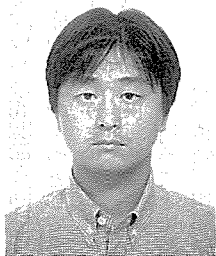
この度は、名誉あるの  
のはな同窓会学術賞をいた  
だき心より感謝申し上げます。  
私は、昭和63年に宮崎医科  
大学を卒業し、同年4月千  
葉大学第二内科に入局、以  
降齋藤教授、岩本助教授を  
はじめた皆さんの先輩達か  
ら多くの事を学び、また少  
しずつ環境を変えて勉強、  
研究する機会を与えられて  
きました。この場を借りて  
深謝致します。加えて平成  
6年から3年間は米国国立  
衛生研究所・国立心肺血液  
研究所のLeonard博士の  
もとで研究を行い、サイト  
カインシグナル伝達に関す  
る最新の研究方法の習得は  
もちろんのこと、世界各国  
から集まった研究者達に測  
り知れない驚愕を含めた刺  
激を受けてまいりました。

20年近くご指導をしてくだ  
さいました今野昭義教授、  
一緒に研究をしてください  
ましたアレルギー研究班の  
諸先生方にこの場をお借り  
して心より感謝いたします。

現在は、アレルギー性疾患の病態解明および治療法の確立を目指し、多くの後輩の先生達と共に研究する機会を与えられ、未熟ながらも今までに学んだことを伝え、時には後輩の先生達の新鮮な考え方やものの見方に行き詰まった研究の打開策を見出す充実した日々を過ごしております。今回ゐのはな賞を頂いた研究も第二内科免疫アレルギー研究室にて、後輩の先生達と一緒に進んでいる研究の一つであり、現在もアレルギー疾患治療への応用を目指し活発に研究を続けております。今後基礎的な研究を通じて、アレルギー患者さんの利益に少しでも結びつくような研究ができるように、より一層の精進を重ねて行きたいと思っております。

## 千葉大第一外科

西谷 慶 (平4)



この度は名誉あるゐのはな同窓会学術賞に選出されたこと、大変光栄に感じております。私は平成4年に千葉大学医学部を卒業後、

中島伸之先生教授のもと第一外科に入局致しました。それから約5年間の外科研修を終え、平成9年度より田代重彦先生(現上都賀総合病院院長)、山森秀夫先生(現済生会習志野病院副院長)の指導する第一外科第四研究室に所属し臨床研究に取り組みることとなりました。第一外科第四研究室では消化器外科の中でも過大な侵襲を伴う食道外科、脾臓外科を取り扱っており、このような過大な外科侵襲下における代謝系や免疫系の変化、手術侵襲度に応じた至適な栄養投与法の検討、N3系多価不飽和脂肪酸等の脂質代謝、経腸栄養、経腸栄養につき基礎的、臨床的な研究を行っております。この中で私は、寄生虫学教室、矢野明彦教授の指導のもと「外科侵襲下における代謝系及び免疫系の変化」についての研究を手掛けることとなりました。

手術や外傷等の侵襲下における宿主の感染性への抵抗減弱は日和見感染として従来より広く知られており、現在でも臨床的な問題となっております。感染のモデルとしてARDS患者における脳症や感染臓器の移植による医原性感染が最近問題となっているトキソプラズマ

原虫を用いて、又侵襲のモデルとして熱傷マウスを用いて、侵襲下の宿主の生体防御能や感染感受性の変化、免疫能の変化とそれに伴うサイトカインの変化、代謝系の変化について基礎的な研究を行いました。

基礎研究の経験の無い私に、懇切丁寧な指導をしていただいた矢野教授をはじめ寄生虫学教室の諸先生方ならびに教室員の皆様、研究の監督、指導をしていただいた田代、山森両先生共同で研究を行った第一外科第四研究室の皆様にはこの場をお借りして深く感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、今後一層の努力を重ねる所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

## 千葉大助手

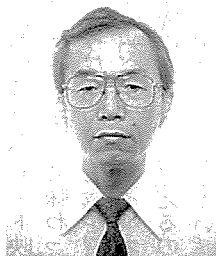
野呂瀬一美 (信州大昭52)



この度は、ゐのはな同窓会学術賞をいただき、心より感謝申し上げます。私は、昭和52年に信州大学医学部を卒業し、同眼科

学教室に入局いたしました。眼科臨床医として特に、我が国における三大ぶどう膜炎の一つであります原田病に興味を持ち臨床研究をしてまいりました。原田病は自己メラノサイトに対する自己免疫疾患といわれておりまして、治療期には、脈絡膜の色素脱出をおこし、特徴的な夕焼け様眼底を呈します。ぶどう膜炎を専門にしておりました関係から現在千葉大学教授となられました。信州大学講師であられました矢野明彦先生よりトキソプラズマ症の患者さんを紹介していただき、矢野先生より免疫学の手ほどきを受けるようになりしました。トキソプラズマ症はトキソプラズマ性網脈絡膜炎を引き起こしますが、メラノサイトを豊富に含む脈絡膜および網膜を標的とし、高度の色素沈着のある特徴的な癍痕病巣を残すぶどう膜炎です。同じぶどう膜炎でありながら、原田病は色素脱出を、トキソプラズマ性網脈絡膜炎は色素沈着を引き起こすことから、メラノサイトがこれら二つの疾患の発症機序に密接に関与していることが示唆されます。さらに、熱ショック蛋白の一つでありますHSP70がメラノサイ

トによる抗原提示機構に分子シャペロンとして重要な働きを持っているというところがわかってまいりました。平成11年より、矢野先生に声をかけていただき、千葉大学に籍をおき、研究を継続させていただいております。今回の受賞の対象となりました仕事は、矢野先生の御指導のたまものであり、あらためて、感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、より一層の努力を重ねる所存ですので宜しく願ひ申し上げます。

千葉大助教授  
日和佐隆樹 (東大理昭50)

この度はゐのはな同窓会学術賞をいただき、誠に感謝申し上げます。私は千葉県がんセンター研究所に長く勤務しておりましたが、平成9年より千葉大学医学部生化学第二講座に、そして平成10年より生化学第一講座(現医学研究院・遺伝子生化学教室)にお世話になっております。以前よりタンパク質分解酵素(プロテアーゼ)が発がん

に関わっているのではなにかと推定し、研究を続けてまいりましたが、プロテアーゼの中でも特にシステイン系のプロテアーゼが発がんを抑制するという証拠を発見し、この度「システイン・プロテアーゼのがん抑制効果に関する研究」というテーマで受賞することができました。

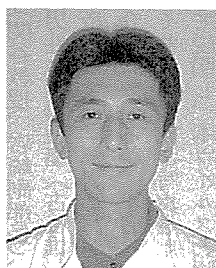
システイン・プロテアーゼにはアポトーシスを誘導するカスパーゼ群、筋ジストロフィーや糖尿病に関わるカルパイン群、そして血管新生やレセプター分解に関与するカテプシン群などがあり、それらの複数のものががん抑制に働いていることがわかりました。

20世紀末は遺伝子工学の発達により、遺伝子のみを取り扱う研究が主流でしたが、ヒトゲノム解析もほぼ終わり、21世紀はその遺伝子プロダクト(タンパク質)の機能解析の時代になると予想されます。そうしますとそれらタンパク質の働くところには必ずプロテアーゼが影響を与えるわけで、プロテアーゼがさまざまな生命現象を制御している可能性が考えられます。本受賞を励みに、今後なお一層、プロテアーゼの影響下におけるタンパク質の

機能の解析に励みたいと存じます。

## 千葉労災病院整形外科

村田泰章 (平5)



この度は、第6回のゐのはな同窓会学術賞に選出されたこと、大変うれしく光栄に感じております。ゐのはな同窓会の諸先生、役員の皆様はこの場をお借りして心から御礼申し上げます。ゐのはな同窓会総会の受賞式には、本来ならば万難を排し出席したいところでしたが、式当日はInternational Society for the Study of Lumbar Spine (今年はイギリスのEdinburghでありました)という国際会議に出席しており、誠に残念ながら欠席とさせていただきます。その学会では、口演1演題とポスター2演題の計3演題の発表を行ってまいりました。さて、このたび賞をいただくことになった仙腸関節の神経支配に関する研究は、守屋秀繁教授の御指導のもと平成9年4月より実験を行ってまいりました。実験

には、解剖実習用の遺体標本やラットを用いましたが、そもそも仙腸関節とは骨盤の腸骨と仙骨の間の隙間に存在する関節の名称です。椎間板や椎間関節と同様に腰痛の原因の1つとして考えられております。また、近年、仙腸関節のマニピュレーションを行うことで腰痛をはじめ、膝痛、頸部痛が改善されるという理学療法が行われるようになってきました。しかし、仙腸関節についての国内外での基礎研究は、これまでのところ肉眼解剖学的研究がほとんどで、それ以外では、仙腸関節に関連した基礎研究

## 同窓会 員 著 書 の 紹 介

奥山隆保 (昭37) 著

### 「合わない枕は病氣をつくる」

ハート出版 定価1300円

奥山恭子 (平4)



日本人には肩こりが多いと言われますが、肩こり、首のこり、頭痛などは、あって当たり前とあきらめて、ずっとつきあっている人も

は、ほとんどありませんでした。そこで私は、逆行性神経トレーサーを仙腸関節に注入して、免疫組織化学染色を行うことにより仙腸関節の神経支配を新たな観点から解明しました。そして、これまで報告されてきた肉眼解剖学的な仙腸関節に関する知見の問題点を浮き彫りにし、さらに詳細に検討することでこれまで知られていなかった神経支配の形態を解明し報告いたしました。

基礎いた枕についての解説第三章は、枕が合わないときに起こってくる症状(首すじの痛み、肩こり、頭痛、手のしびれ、いびきめまいなど)について、第四章は、不眠について、第五章は、「首にやさしい枕の高さ、大きさ、硬さなどの具体的内容、自分にぴったりの「EVA枕」のつくり方が記されています。

枕というのは、人生の1/3の時間、頭部をゆだねるものであり首の状態が良くない人には、大変重要なものだと思います。

前述のような様々な症状があるのに、これといった病気のない人や、診断がついても治療効果がいまいとつ、という人の場合、枕を自分にとって合ったものに変えてみることも、方法の一つだと思います。

者の清水文七名誉教授(千葉大学医学部)はウイルス学研究のみならず、文学にも大変造詣が深く、氏の書かれた「ウイルスがわかる」(ブルーバックス、1996)や「ウイルスの正体を捕らえる」(朝日選書、2000)はその見事な文章とわくわくするようなストーリー展開から深く静かに医学に縁のない方々にも広まりつつある。

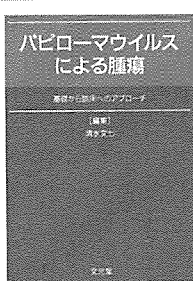
ウイルス蛋白(E6、7)の存在の下、不活化する過程が自ずと理解出来、有り難い。「自ずと理解出来」と記したが、それが篠論司氏(千葉大学医学部)によるヒトパピローマウイルスの初期遺伝子機能に関する明快な解説を踏まえてであることは言を待たない。

### 清水文七 (編)

### 「パピローマウイルスによる腫瘍」 —基礎から臨床へのアプローチ—

文光堂 定価8,000円

稲葉憲之 (昭47)



本書はB5版、約200頁からなる大変読みやすいパピ

ローマウイルスとその腫瘍に関する総合的な医学解説書である。豊富な図表と平易・簡潔な記述が必ずしも易しいとは言えない命題を若い研修医や学生、コ・メディカルの方々にも理解しやすいものになっている。編

者の清水文七名誉教授(千葉大学医学部)はウイルス学研究のみならず、文学にも大変造詣が深く、氏の書かれた「ウイルスがわかる」(ブルーバックス、1996)や「ウイルスの正体を捕らえる」(朝日選書、2000)はその見事な文章とわくわくするようなストーリー展開から深く静かに医学に縁のない方々にも広まりつつある。

してパピローマウイルスが「DNA腫瘍ウイルス」の御三家に肩を並べることが出来るようになったか、その歴史的背景が活写されている。次いで、今までに判明しているウイルス学的知見が富田善身氏(千葉大学医学部助教授)によって簡潔に解説され、第三章(臨床)で関谷宗英氏(千葉大学医学部教授)、岩崎秀昭氏(千葉市立病院副部長)によ

白澤氏の解説は第二章の本ウイルスによる子宮頸部扁平上皮の発がん機構の説明でも益々冴えわたり、感染細胞(角化上皮細胞)が

以上、本書を簡単に紹介したが読後強く感じたことは、特に清水氏、白澤氏、両師弟のパピローマウール

森崎信尋(昭50)著

## 「平成徒然草」

平成徒然草



小生は医学畑で分子生物学を専門としてまいりました。が、「世界を深く認識し、いかに良く生きるか」という問題への追求には、いつしか、分子生物学だけでははなはだ不満足であると感ずるようになりました。現代に生きる以上分子生物学に音痴では絶対いけません、進化論・脳科学・生態学・コンピュータ生物学(人工知能、ニューラルネットワーク)及びそれらの哲学も必須であります。また、その様な学問のベースとしての現代物理学(素粒子学・量子力学・宇宙論・カオスと複雑性の科学)、そのまたベースとしての数学と論理学、そしてそれらの哲学が要求されます。存在論や認識論を扱う「いわゆる哲

スに対するなみなならぬ愛情にも似た研究心である。是非ご一読賜りたい。

「いわゆる哲学」、芸術、宗教、社会科学(マルクス主義哲学)に頼るほかありません。科学者で後者の文化領域に無知であるのもこれまた恥ずかしいことでもあります。

そうしますと、「世界を深く認識し、いかに良く生きるか」という永遠に続く難問への探求は、上記の幅広い文化領域の全成果を総動員せざるを得ません。このような遠大な計画から、小生は、諸科学と諸文化の哲学の総合、いわば総合哲学、あるいは学際哲学を目指すことに致しました。一人で学際とは不遜なようで

すが、原理上は総ての学究は学際的でなければなりません。命が短く感じられま

「平成徒然草」はそのほんの序章であります。兼好法師にはしかられそうですが、小生の意気免じて墓場の底で苦笑しながら許してくれるものと思います。

なお、続いて、「平成随想録」と「平成随想録」の姉妹編を刊行予定にしております。モンテニョとパスカルとともに今しばらくお待ち下さいませ。また将来は体系的な成果を挙げたいと念願しております。

森崎信尋(昭50)

## 産科婦人科学教室同窓会の昨今

産婦人科同窓会長

村瀬 靖(昭30)

私は昭和30年医学部を卒業、教室に13年間在籍した。岩津俊衛、御園生雄三、高見澤裕吉教授の薫陶を受けたが、岩津先生は東大卒、助教授として本学へ赴任され、後教授になられた。手術の名手で子宮癌の子宮全摘手術は所謂 Wertheim、30分前後で終わり我々機械出しはデブを要求された。入局時親しい先輩から学会発表より野球やテニスに情熱を燃やした方が教授の覚

えがめでたいとアドバイスを受けたが、実際はそうでもなく、私は教授室で親しく病理ミクロ所見を教えていただいた。御園生先生は水戸高出身で大人の風格があり、ヒストヘミの宿題報告を立派にされた。我々の労作『論文集』は、中山恒明教授からヒストヘミのBIBLIOとおほめをいただいた。4研のメンバーが研究を担当したが、全員双眼のミクロスコップを与えら

れ何日も徹夜して切片を染色し検鏡した。御園生先生は皆に優しく、叱責された医局員は1人もいなかった。高見沢先生はスポーツマンで今でもシニアテニスに熱中されている。教室ではサポートする医局員が俊英揃いで立派に日産婦総会を開催された。現在の教授関谷宗英先生は、久しぶりの学者肌の方で、オンコロジーの分野では我々同窓生は、鼻が高い。教室から育った逸材として防大の永田一郎、小林充尚、菊池義公3教授、獨協医大の稲葉憲之教授が居られる。稲葉教授は中国のハルビン医科大学の名誉教授と、ダイレン医科大の客員教授に任命され、現地で子宮癌や卵巣癌など婦人科領域の癌手術の指導をしている。杏雲堂の天神美夫名誉院長は癌検診や癌のレーザ治療の第一人者である。同窓会の会則は天神先生と私が委員長として皆の協力を得て作成した。教室には在籍されなかったが、東大医局から女子医大で教授をされた中林正雄先生は温厚な学者で皆の信望が厚い。我々の産婦人科同窓会は実際は同門



会なので、広く門戸を広げ、文字通りの同窓会にすべく努力している。教室と同窓会の関係は科により亦大学により様々であるが、我々の同窓会は幸い、同窓生が会長になる規約なので、和気藹々で理想的である。同窓会費は拠出して下さった先生方がお元気な中に有効に使うべく役員一同叡智をしばっている。亦教室あつての同窓会故、教室員の研究レベルアップに大いに貢献すべきだと思っている。

## 平成13年度 新入生早期学外 研修の報告

平成13年度より千葉大学医学部学務委員会では早期体験学習(Early Exposure)の一環として新入生の早期学外研修を企画することになった。本企画の目的は医学を志す学生のためのワークショップであり、以下の内容で行った。

- 一、期 日：平成13年5月12日(土)～5月13日(日)(1泊2日)
  - 二、場 所：千葉厚生年金休暇センター
  - 三、参加者：学生95名(96名中1名欠席)
  - 四、スケジュール
- 第1日目
- 13:30 研修開始
  - 福田医学部長挨拶
  - 湯浅学務委員長挨拶
  - 参加者 自己紹介
  - 15:30 セミナー
  - 1、野田公俊先生(病原因子制御学)
  - ミクロの世界からのメッセージ
  - 2、篠崎勇介君(医学部5年生)
  - 医学部における学生生活
  - 3、中西加寿也先生(救急

## 集中治療医学)

医療事故と危機管理  
4、大和田英美先生(基礎病理学)

医学士としての生活上の注意  
19:00~21:00

懇親会(夕食・パーティー)

第2日目

9:00 セミナー

1、塩見真理子さん(今春卒業)

2、森 千里先生(環境生命医学)

環境問題と医学

10:30~12:00

グループディスカッション

テーマ: 環境問題、医療の国際協力、医療事故、脳死・臓器移植  
12:00~12:45

## 総合討論

尚、グループディスカッションについては、参加学生を8グループに分け、各グループ毎に指導教官が1名担当し、KJ法(文殊カード法)によるグループ学習を1グループが1テーマにつき行った。結果を2次元展開法によりまとめる方向で指導した。各グループの発表は質疑応答を含め、5分以内とし、代表者1人が発表し、発表内容のまとめもグループ毎に提出させた。

また、後日、参加学生より本研修会に参加した感想文を提出してもらった。グループディスカッションでの各グループ毎の発表内容のレポート、ならびに早期学外研修参加の感想文の一部は、平成13年度の早期体験学習(Early Exposure)報告書に収録される予定であるので参照されたい。



(学務委員 大沼直躬)

## クラス会

白兔会  
昭和三十七年

平成13年春のクラス会(白兔会)は、4月22日に東京駅構内の精養軒で開催した。

出席者は級友8名と故人の奥様方5名の計13名であった。いつもの顔ぶれに今回は特に秋田県大曲市から遠いところを下山賢次君が参加してくれた。現役で診療に従事している者は少なくなったが、みんな元気で昼食を共にしながら、近況報告やらなつかしい思い出話やらで、二時間余り楽しい歓談の一時を過ごした。中でも故三浦寛君の奥様碧子さまには、海外公益法人日本ASEAN ビップレディス財団会長、米国財団法人世界平和財団副総裁、社団法人昭和経済会常任理事等の要職につかれており、三浦医院経営の傍ら各方面で大活躍されておられることを知り、出席者一同大変感服した。なお、三



(水間正冬)

## 八千会

卒五十年記念  
専26卒

浦寛君は千葉医大在学中は野球部のエースとして活躍し、戦後東京都墨田区で開業していたが、残念なことに平成10年6月に他界された。亡くなられるまでお酒と野球が大好きという男であった。

少人数ではあるが、級友奥様方共々秋に又会うことを楽しみにして散会した。

写真は、前列左から浦部秀子、橋爪文子、数馬智恵子、三浦碧子、木村照子、後列左から松永幹、本間哲雄、藤村満寿夫、下山賢次、中村泰治、大村光、窪田静夫、水間正冬。

平成十三年五月十九日、八千会総会・懇親会が千葉地区担当の森巨敬会長、小関・大沢両幹事の手配により、幕張メッセ隣り、海浜にそそりたつ、プリンスホテル46階会場で盛大に開催された。今回は沖繩からは藤江君、久し振りに函館から多田君と日本列島両端からの出席を得て総員16名(公井良夫・上野友弥・大沢弘和・片桐優・智留丸・小関芳昌・佐藤宏・田口貞文・多田桂一・津村澄雄・原寛・林裕平・平川達・藤江良雄・本間彬・森巨敬敬称略)の参加者となった。只、誠に残念であったのはクラス最後の担任であった恩師百瀬剛一先生が「皆さんの顔が見たい」と最後まで出席に意欲を見せておられたのに当日、体調不良の為、突然欠席された事である。

受付で佐世保の原君のお世話による記念品(オリジナルの有田焼のループ帯)をお渡しして、午後六時過ぎ開会する。開会に先立ち今年三月、急逝された田中・青島両君を含む14名のご冥福を祈り黙祷を捧げる。次いで森巨敬会長の挨拶、ここの所体調不良が続く欠席となった大田和明総務に代わり幹事の大沢が総務報告を行う。その際昨年の長野の会で大変なおもてなしをされた今井良夫君と記念品作製にご尽力頂いた原寛君へのお礼、今回五十周年の盛会を祈っての大田総務からの祝電を披露、又、青島夫人からご祝儀が送られてきた事を報告する。続いて会計報告に移り、小関監事より監査承認の報告があり総会を終了する。

次いで司会是小関幹事に交替、懇親会となる乾杯発声は一番遠方より来られた者と言うしきたりに沿って沖繩の藤江君が音頭をとって祝杯をあげる。中華料理に舌づつみをうちそろそろ酔いの回った頃を見計らい各自の近況報告がなされる。身体のこと、勤めのこと、趣味のこと、亡き友人のこと、生き方のこと延々としゃべる者もあって大いに盛り上がり時の経つのも忘れるほどであった。予定の八時を過ぎて東京近郊の数人は別れを惜しみつつ帰路につ



かれたが宿泊組を含め11名が二次会場50階ラウンジに向かう。

幅広のネックレスのように綺麗めく東京湾を一望する夜景を鑑賞しながら苦しくも楽しかったあの終戦直後の学生時代の思い出話に花が咲き、大いに旧交を暖め合う。酔いも回り多少下世話な話に落ちた頃既に十時を回り、お開きとなった。翌二十日も快晴に恵まれ屋食の為の集合場所を海浜幕張駅北口前スプリングスホテル別館ロビーに定めて自由行動となる。九時過ぎプリンスホテルのロビーで顔を会わせた8名(今井・大沢・小関・佐藤・原・林・藤江・森・諸氏)は三三五

五グループで集合同所に向かい出発する。大方の者は日本庭園、見浜園の庭園美を鑑賞したものと思われる。我々のグループも新緑に映える庭園を写真を撮り合ひながら一周し茶室に寄って老婦人の接待で立てたお茶を飲みつつ庭園の説明を受ける。汗ばんだ身体にそよ風が気持ち良く小休止の後中心街を避け、花に彩られた日時計のある公園を通り駅南口ショッピングモールに着きアウトレットの店を覗いて駅を抜け集合同所ロビーに至る。既に佐藤・藤江君は到着していて遅れて今井・林君が到着、揃って二階の和食店に入りビールで乾杯、小会席をとりながら雑談にふけり楽しいひとときを過ごす。一時を過ぎて来年の函館の再会を胸に別れを惜しみつつ散会していった。

(大沢弘和)



爾久会

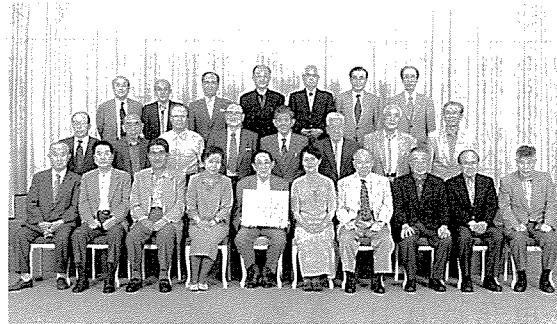
(昭和29年)

今年には埼玉県在住者が担当することとなり、長瀬を中心に行われました。13年5月26、27日(土、日)同伴者を含めて25名。西武長瀬ホテルで夕食を囲み、それぞれの生き様や、友達の情報など語り合い、或るも

のは七十才は人生の駆け出しだと言ひ、或るものは何時誰が起きてもおかしくないと言ひ、楽しい盛りあがりとなりました。さすが長瀬までわざわざ出席されたメンバーだけに元氣そのもの、殆どが尚医療に係わっておられます。最後に勇ましい秩父和太鼓の響に又々勢いづいた様子でした。翌日観光組は時たま霧雨の降る新緑の中を長瀬ライン下り、吉見

百穴であやしく光る苔に感心し、行田市近くのさきたま風土記の丘を訪ね、九基の古墳群をまわり、さきたまの地が関東での占める歴史的意義を初めて認識、多数の出土品の中で特に国宝金錯銘鉄剣は素晴しく金象眼の文字がはっきりと読める。半日ドライブでのおすすめコースと言えらる。他の7名のメンバーは御荷鉢カントリー倶楽部に雨もなく良好のコンディション、きれいなコースだねと褒めながらも難コースで名プレー珍プレーありの和氣藹々のゴルフでした。優勝者はベリア方式で和田君、BGは地主の中神君。

五月の良い季節でのクラス会は成功でした。



次回は野口君が銚子でやることを引受けてくれ、又元氣で再会しようと思ふ熊谷駅で別れました。幹事の河野君、中神君にはすっかりお世話になり有難う存じます。出席者

川野元茂、小出紀、佐野迪雄、島崎淳、富岡清海、富岡正光、西三郎、野口晃平、羽生富士夫、福井朗、福田恵司、山田兼雄、和田房治、窪田淑子夫妻、朝岡威親、飯田広美、大原一夫、若菜担夫妻、樋口道雄、有馬道男、中神恒男、河野保久、山森喬夫

森島邦夫君 昨年十月逝去されました。謹んでご冥福を祈りお伝えします。(山森喬夫)

五五会 (昭和30年)

年例会が5月26日(土)、JR錦糸町駅近くの東京マリオートホテル錦糸町東武で、在京有志幹事団により催された。先ず、記念撮影宴は着席バイキングで、この一年の他界2名への黙祷のあと始まった。私達の学年は、海兵や陸士かえりの者のために、入学者が20名多く100名だが、物故者24名のアナウンスを級友たちはどんな気持ちで聞いたろうか。出席が36名と多かったのは村瀬靖当番幹事長の努力による。欠席返信のうち体調不良のためと書き加えた級友が4名いたという。乾杯がすんで酔いのまわらぬうちにと一分間スピーチ、しゃべり上手に聴き上手ばかりで、飲みながら食べながらのなごやかな時が流れてゆく。クラス会出席は、家族を含めての健康と時間的余裕が必要条件で、何より「出席への意欲」が満たされること共に幸せな人生を歩んでいる証でもある。

2時間は短く過ぎ去りました。高橋康来年度当



番幹事長の挨拶「来年秋は地方で」で閉会した。翌日の観光やゴルフはなにかわりに、「二次会はサバークラブ「ミルベール」へ14名が繰り込んで楽しんだ。〈出席〉

|       |       |
|-------|-------|
| 浅見 敦  | 浅利 行男 |
| 新井多喜男 | 伊谷 昭幸 |
| 内海 湜  | 大坪 雄三 |
| 片山 喬  | 加濃 正明 |
| 上牧 順三 | 小泉 準三 |
| 後藤 澄夫 | 斎藤 正道 |
| 指田 和明 | 清水 良平 |
| 志村 昭光 | 鈴木裕太郎 |
| 高橋 康  | 高橋 宣光 |
| 滝口 光雄 | 十束 支朗 |
| 富田 裕  | 中野 政雄 |
| 永野 俊雄 | 野沢陽一郎 |
| 野本 和男 | 畑 譲   |
| 平山 皓  | 藤山 嘉信 |
| 宮内 好正 | 村瀬 靖  |

埼玉県立大学見学会 (昭和31年)

われわれは、梅雨の晴れ間、去る6月23日(土)、平成11年春から同期生北川定謙君(元厚生省保健医療局長)が学長を務める埼玉県立大学を訪問した。大学は、地下鉄日比谷線直通、東武伊勢崎線せんげん台駅下車、駅より1.5kmに位置する。北川学長が掲げる、全国初の保健・医療・福祉の連携と統合を図り、「あたたかい心と確かな技術」をもった人材を養成することを目標にした、四年制の保健医療福祉学部と、短期大学部とからなる。完成時には定員1,250名、職員数は現在204名であるという。

キャンパスは10万㎡、敷地3.4万㎡、延べ床面積5.4万㎡の鉄骨鉄筋4階建ての近代建築である。正面を入ると、左右300mに及ぶ壮大なガラス張りのモダンなビルが目に入る。



われわれ一行は、午後3時過ぎに集合し、北川学長夫妻の心温まるおもてなしをうけ、休日のところ、懇切な案内で、学内の主要な部分を見学した。ユニークな講堂、行き届いた設備のある教室や実習室、空調完備のバスケットコート2面をもつ素晴らしい体育館、300mのトラックをもつグラウンド、4面のテニスコート、学内のところどころの壁に散りばめて張られてあるモダンアートが目を楽しませてくれる。まさに、日本一の看護学部、福祉学部であると思う。

夏至の翌日のまだ明るい夕べ、予定よりオーバーして午後6時半、吉川市平沼にある創業30年、名物なま

ず料理、料亭粋家(こうじや)に着く。その昔、近藤勇、板垣退助もこの店の川魚料理を食べたとか。山崎武君も合流して、総勢13名の大会がはじまった。歓談相きないところ、午後8時半、三坪の手締めをもって散会した。

出席者…北川定謙、庵原昭一、井幡宏、西原源太郎、森碧、森博志、山野元山、山口慶三、山崎武、小野清四郎の諸君。計13名。

(\*印はご夫婦)

(小野清四郎)



一昨年より沖繩、群馬県草津での開催をへて平成13年度の参旧会は5月12日(土) 19時30分より信州松本的美ヶ原温泉ホテル「翔峰」で開かれた。昨年8月に中野勝君が逝去され、そのご冥福を祈ったあと総会を開いた。各々方から近況が報告され、多くの学友が62歳をむかえ、定年や離職の年が近づきつつあることを実感した。

事務局の木内政寛、千葉胤道両君から卒業30周年、35周年の記念事業、および平成5年度からの会務報告が行われ、平成7年度と11年度の二度にわたっての猪

之鼻奨学会への寄付(総額100万円)に対する猪之鼻奨学会からの感謝状が披露された。現在のところ

参旧会の年会費は徴収されておらず、卒業40周年の記念事業を行うか否かの提案がなされた。次回の参旧会は清水天君と山口政敏君を世話人として、山梨県下で行うことを決めた。

翌日の5月13日(日)には2組に分

かれ12名は穂高カントリークラブでゴルフを、29名は上高地へ観光に向かった。雲ひとつない好天気にめぐまれ、上高地では焼岳穂高連峰、明神岳が残雪をいただいてくっきりと姿を

## 祝 叙 勲

平成13年 春の叙勲

勲四等旭日小綬章

香取 郁雄(専23)

勲四等瑞宝章

勝呂 安(専20)

勲五等双光旭日章

澤田 仔夫(専23)

福田 恵司(昭29)

木村 泰人(群大昭30)



## 各地のなはな会

だより

あらわし、参加者一同大きな感激であった。学生時代の元気で明神池まで自然探勝をした後、無事松本にもどり、甲府での再会を期して散会した。

(重松秀一)

## 江戸川のはな会便り

去る平成13年5月19日(土) 恒例の江戸川のはな会総会を例年通り市川の料亭「栃木屋」で開催した。今回のゲストは母校から田辺政裕教授(昭49、卒業生

涯医学臨床研修部)、白澤浩教授(昭57、分子ウイルス学)、宮崎勝教授(昭50、臓器制御外科学)と小生のクラスメート永野俊雄名誉教授(昭30、解剖学)の4名、出席会員13名と受付事務兼歌手の喜久子嬢で計18名であった。総会と云っても全会員数42名の小世帯、懇親を主とするのはな会故、和気藹々の雰囲気の中に会計報告、予算も全員一致で承認された。唯一目新しい計画として、会員及び家族の消息的会報を発刊する事も心よく承認され、早速の収集活動が始まった。会長挨拶の後、母校の講座制度大改変を分り易く各教授から解説していただいたが、出身教室と同窓会との結び付きが弱くならないかと会員の多くが心配していた。最近の本部のはな会同窓会編集発行の「のはな会同窓会報」は頁数も多く、内容も濃く楽しい記事が多いので出席会員一同感謝していた。田辺政裕教授から卒業生涯医学臨床研修の卒業生への開放のお薦めは、既に山上健次郎先生の御経験もあり、興味深かった。江戸川区は他地区に比べ会員数が多く、区医師会の中での発言力も強く、また先輩が何人も医師会長を歴任されたので幸せである。また今回の様に母校から3人もの優秀な新進鋭の教授が来賓され、会員にとり嬉しい限りであった。他大学、特に私大に比べ母校との連帯感が薄いと云われている千葉大出身者は、各分野での活動を活性化するために地区のはな会の団結が必要と痛感した。母校教室への患者紹介率を増やし、また教室は他私大の如く迅速、丁寧に対応していただく事もこれからは重要であろう。

他大学の如く、Lehr stiz



や管理職の獲得に大いに努力していただき、流石千葉大は関東では東大と並ぶ雄と云われるよう、我々のはな会員は奮起し、あらゆる面で母校に協力したいと誓い合い楽しい土曜日の夕を過した。

(江戸川のはな会会長 村瀬 靖・昭30)

## 四国のはな会便り

四国のはな会の第2回目の会合が平成13年4月21日に松山市道後温泉大和屋本店にて開催されました。本会は昨年に結成され、第1回の会合が昨年、高知市にて開催されました。その席上にて、以後毎年、四国

になりました。会長小越章平先生(高知医科大学副学長)の挨拶にはじまり、当番県を代表して牧野英一先生(愛媛大学医学部臨床検査医学(糖尿病内科)教授)の音頭にて全員で乾杯をしたのち、各自自己紹介を行いました。瀬戸内の新鮮な料理を肴にし、愛媛の銘酒を堪能しながら、懐かしい昔話から最近の医療情勢、医学教育、国立大学の独立行政法人化の問題にまで話ははずみ大いに盛り上がり、第3回の会合を来年、香川県にて開催することを決定し散会いたしました。出席者は以下のとおりです。(敬称略) 森山典夫夫妻



千葉県のはな会便り

(昭28)、小越章平夫妻(昭36)、牧野英一夫妻(昭42)、内海武彦夫妻(昭44)、山本日出樹夫妻(昭50)、松谷和徳(昭50)、多田羅勝義夫妻(昭52)、大澤春彦(昭59)、下田直史(昭61)、大沼裕(平2)

(大沼 裕・平2)

平成13年度  
千葉県のはな会総会  
および本部総会報告

平成13年6月23日(土)

JR千葉駅ペリエホールにおいて開催された。本年度は千葉大学のはな同窓会総会が当会の担当で同日に行われた。午後2時より当会総会が大浜博利(昭27)理事の司会により、秋葉哲生(昭50)理事が開会の辞を、ついで12年度物故会員26名のご冥福を祈って黙祷が捧げられ、続いて渡辺武会長が挨拶のなかで、親睦を基礎として如何に会の活性化を図るかということ、このたび発行した「千葉県のはな会誌」も、その趣旨にそったものであり、この会誌に多くの会員からの投稿を頂き、会員の動向をはじめとして各種の情報交換、さらには質疑応答の

コーナーを設置するなど、全会員の創意工夫を集積したいと述べた。

恒例により議長に会長を選出し議事に入り、会務報告を茂又眞祐(昭22)理事、会計報告を阿部一憲(昭39)理事、監査報告を国井光智(昭21)監事、13年度事業計画案を大浜理事が行い、それぞれ承認された。事業計画案のなかで毎年1回「会誌」の発行、10ブロックの支部単位での活動の活性化、役員の会務分担ならびに「会誌」の充実のため役員の増員について大藤正雄(昭29)を推挙した。

引き続き午後3時より千葉大学のはな同窓会総会が開かれた(第1面・24面参照)。終わって特別講演「現代の若者はエイリアンか」と題して、千葉県精神保健福祉センター長の矢野徹先生が講演された。要旨は次の通りである。

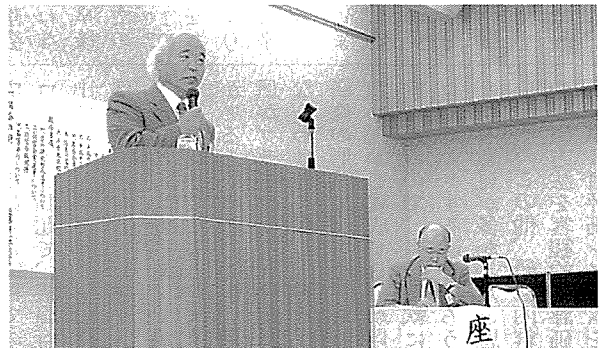
- ① 思春期をめぐる5つの問題。
- ② 本質的に生物発生的に決定



- された現象であるのか、それとも社会的に決定される現象なのか。
- ③ 明確に異なる特殊な段階なのか、それとも一連の成長過程の一部分なのか。
  - ④ 現代社会において、発達相として消滅しつつあるのか、明確になりつつあるのか。
  - ⑤ 心理的安定性を持った時期なのか、危機・破綻・不適応の時期なのか。

- ① 前思春期・・・衝動の
- ② 思春期・青年期の心性について。
- ③ P・ブロス、の青年期の区分と各時期の特徴。
- ④ 後思春期・・・成長期最後の過渡期。
- ⑤ E・H・エリクソンの自我同一性の概念
- ⑥ K・ヤスパース、の自我意識についての4つの形式

- ※自我意識の4つの形式
- ① 能動性の意識
  - ② 単一性の意識
  - ③ 同一性の意識
  - ④ 外界と他人とに対する自我の意識
- ※身体自我の意識も重要な現代の若者に見られる諸現象
- \* ショートスカート・ルーズソックス
  - \* 茶髪・金髪
  - \* 地べたに直に座る
  - \* 電車の中で化粧をしたり、物を食べる



- ⑦ そのような現象を説明する座標軸
  - \* モラトリウム
  - \* 価値観の多様化・自由競争
  - \* と言いつながら少ない選択肢(偏差値)
  - \* 職人の消滅
  - \* 2%エリート
  - \* "public"概念の消滅
  - \* 家長制度・家族制度の崩壊
  - \* "initiation" (加入儀式)
  - \* 子どもが子どもを産み育てること
  - \* 支援組織の崩壊(家族・近所・横町の隠居・仲間等々)
  - \* 商
- ⑧ 売としての「専門家」の登場・マニュアル化
  - \* 生きた人間関係が持てなくなった
  - \* 距離感など



- ① みんなが嫌がることは交替でやる(ごみ処理・老人介護・障害者介護等々)
- ② 同じ釜の飯を食うことの重要性(高等学校全寮制)
- ③ 職人芸・職人的生き方の再評価(本物を評価すること)
- ④ 能率性・経済性とは違った評価軸をな

終わって茂又理事の司会により懇親会が開かれた。近藤洋一郎副会長の開会のことばに続き長澤仁一会長の挨拶、渡辺武副会長の乾杯の音頭で、ろのはな同窓会賞受賞者および学外研究助成者も含めて60名を越す参加者により盛大に始められた。この席で、長年に亘って同窓会の発展に尽力された貫洞一夫前副会長へ長澤会長から記念品が贈呈された。



## 卒後臨床研修必修化に向けて

## 卒後臨床研修必修化の現状

附属病院長 伊藤 晴夫 (昭39)



掛けて欲しいと

のお叱りを受けました。関連病院の先生方は医学・医療に関する大学病院を取り巻く社会的環境に常に耳を傾け、研修医教育の在り方を考えてくださっていることを痛感し、大変有難い思いをいたしました。そこでこの度、卒後・生涯医学臨床研修部の田邊先生と一緒に卒後臨床研修必修化に向けての最近の動きと千葉大学医学部附属病院の取り組みについて述べさせていただきます。

去る7月31日に多数の関連病院の院長先生をお招きし、医学部附属病院で第5回卒後臨床研修に関する懇談会を開催いたしました。暑いなかではありましたが、有意義な協議をすることができました。内容は卒後臨床研修必修化に向けての現在に至るまでの経緯と、最近の動き及び研修協力病院としての協力要請が主でしたが、その席上出席者の先生から大学病院側は関連病院への最新情報の提供を心

修化に向けての最近の動きと千葉大学医学部附属病院の取り組みについて述べさせていただきます。

学界に及ぼすのでしょうか。これにつきましては、4月18日付けのメディアファックスの記事が印象的です。すなわち、本学の先輩で、全国社会保険協会連合会の谷修一副理事長(旧厚生省健康政策局長)が日大ビジネスセミナーで「日本の医療制度の課題と医療の展望」をテーマとした講演のなかで次のように述べられておられます。平成16年4月から医師の卒後臨床研修の必修化により「大学病院・研修指定病院」と「その他の病院」との関係が変化すると予想。「より教育機能が整った施設に若手医師が流れるようになる。」と述べ、卒後臨床研修の必修化が医学教育の改革につながるのと考えております。具体的には、大学病院及び研修協力病院は研修医の評価を受けるため、効率的でより良い研修を修めることのできる病院には多くの志願者が集まり、その反面では、研修医を引きつけることのできない魅力のない病院が生じてしまうという事態が起るかもしれない。これは病院にとっては死活的な意味を持ちます。このため、大学病院と研修協力病院とで病院群を構築する際には、研修医が研修に専念するこ

とのできる教育体制の整備等を図り、広く全国から優秀な人材を集めるよう努力することが求められております。

また、卒後臨床研修の必修化への対応については、6月21日、22日に札幌で開催された国立大学医学部附属病院長会議においても熱心に討議されました。本院は同会議のなかに設置されている常置委員会の委員長を務めさせて頂いておりますので、私は常にコメントを求められる立場にありましたが、ここでは議論の概略を紹介させていただきます。議論の叩き台になりましたのは、常置委員会のなかに設置されている教育研修問題小委員会の作業部会で作成した19ページよりなる「国立大学附属病院卒後臨床研修必修化に向けての指針―中間報告(案)―」でした。なお、これと対をなすものとして34ページよりなる「国立大学附属病院卒後臨床研修共通カリキュラム(案)」が作成されていますが、これは昨年10月に同部会が現カリキュラムの見直しと研修実施体制の検討に着手し、今年6月に中間報告(案)としてまとめたものです。これが現時点で最良の指針であることから、

厚生労働省でもこの中間報告(案)を基に検討しているようです。この案ではⅠ、共通カリキュラムの再編・見直し(改訂)、Ⅱ、質の保証システムの確立、Ⅲ、研修体制の構築、Ⅳ、指導体制の確立、の4つの柱を設定し、各分野における目標設定を行っています。まず、Ⅰ、の共通カリキュラムの再編・見直し(改訂)のところでは、平成14年度から導入される医学教育のモデルコアカリキュラムとの整合性を図り、各診療科に共通して求められる基本的な臨床能力(知識、技量、態度、判断力など)の習得を重視する内容です。特に関心を集めたのは、Ⅱ、の内容中、複数の診療科でのローテート問題で、議論百出でした。ローテートの具体例を呈示すると影響が大きく、それしかないという考えになってしまいう可能性があるので、この案では、全員のローテートが可能なように、研修の形式ではなく、より良い医師を養成するのが目的であるので、より柔軟にローテートする道を探ろうとする意見が多かったと思えます。この他、研修内容や研修方法を客観的に評価する第3者評価システムを

全国レベル、あるいは地域ごとに整備することも提案されています。また、全国マッチングプログラムの導入も打ち出されています。この場合、研修医を受け入れる病院は、研修コアカリキュラムと独自のカリキュラムからなる特色のあるカリキュラムを策定・公開し、研修医を公募することになります。研修医は希望する病院に応募し、研修病院は応募してきた研修医を試験、面接などで選択します。この過程をコンピュータなどを用いて、全国の研修指定病院で統一して行うことで、研修医と研修病院の双方にとって最も望ましいペアを効率的に生み出すというものです。ただ、これは地理的な点で不利な大学からは危機感が表明されました。Ⅲ、の内容では、大学附属病院での研修では研修医は特定の診療科に所属しないで、卒後臨床研修センターなどの組織に所属して定められた研修プログラムに沿って研修を行うということでした。これは、いわゆる医局制からの脱却を打ち出したものです。地域医療の現場で臨床経験を積めるよう、大学病院と研修協力病院とで研修施設を構築し、そのなかで研

修を実施することになりますが、この部分は我々にとって特に注目し、また努力するべき点であると思われるので、中間報告(案)で提言のあった「研修協力病院との研修体制の確立」の部分を以下に掲載いたします。(1) 研修協力病院は臨床研修指定病院レベルの病院が望ましいが、各大学病院で事情が異なるので、各大学病院で検討し協力を確立してゆく。(2) 病院群を構築する場合、大学病院と研修協力病院との関係は大学病院が主、協力病院が従の関係もあり、場合によっては逆の主従関係も成り立つ。(3) 大学病院あるいは臨床研修指定病院においては、その病院独自の義務研修が構築できるが(単独病院研修方式)、他病院に所属する研修医を受け入れて協力する場合もあり(複数病院研修方式)、これらの両研修方式を並列して不平等なく実施が可能となるよう各病院での検討が望まれる。(4) 大学病院と研修協力病院が病院群を構築する場合、病院対病院の全体での協力のみならず、充実した研修が予想される特別な科があればその科のみ、あるいは診療所などの施設

の協力もあり得る。以上のように中間報告(案)ではかなり具体的な協力方法が例示されています。是非このような有効な病院群を構築して、多くの研修医を受け入れ、効果的な研修の場を提供していきたいと考えています。秋頃には、この中間報告の最終案ができあがる見込みですのでその時点でまたご報告したいと思っています。

次に臨床教授制度についての概要と、その検討状況を報告いたします。以前、医学部で主に卒前教育を対象に臨床教授制度の検証をしたことがあったようですが、今日の状況を見ますと大学病院と研修協力病院との連携は緊急を要する問題となってきました。有意義で効果的な連携を成功させるための一つの方法として、是非とも臨床教授制度を確立すべきと考えています。前述いたしました中間報告(案)でもこの制度の活用について例をあげて奨めていきます。以下に、この箇所を転載させていただきます。大学病院と病院群を形成して卒後臨床研修を担当する関連病院の医師に対して、臨床教授制度を積極的に活用し、卒後教育に対するインセンティブとする。具体的な基

準例として、1、臨床教授・年齢制限(63歳未満)、臨床経験20年以上かつ臨床教育経験(病院における臨床研修担当者等)15年以上論文等。2、臨床助教授・年齢制限(上に同じ)、臨床経験15年以上かつ臨床教育経験10年以上、論文等。3、臨床講師・年齢制限(上に同じ)、臨床経験10年以上かつ臨床教育経験5年以上、論文不要。となつて

います。この制度は既にかなりの数の大学で導入しております。このことにつきましては、先日、本院の改革委員会と医学研究院の企画委員会との合同委員会

臨床教授制度の導入について審議を行い了承されました。今後、関係規程の整備を図るなど早期の実現に努めてまいりたいと考えています。なお、臨床教授などの任命権者は研究院長(旧医学部長)です。

最後に卒後臨床研修が必修化される期日がせまってきた現在、我々の行うべきことは何であるかをきちんと見極めて、積極的に整備・充実を図る必要があると考えます。千葉大学医学部附属病院のますますの発展のため、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

### 千葉大学における取り組み

卒後・生涯医学臨床研修部

田邊 政 裕 (昭49)

千葉大学医学部附属病院(本院)での臨床教育と卒後研修の企画、運営に携る立場から卒後研修必修化についての意見を述べさせていただきます。

卒後研修が必修化されることによって実施される研修体制、研修プログラム、研修病院の指定基準等は厚生労働省が本年の6月に立ち上げた医道審議会医師分科会医師臨床研修検討部会で来年度(平成14年)中に

あります。それが仮に素晴らしい内容に仕上がったとしても、そのプログラムで実際に研修を受けた研修医がいけない或は少ないという状況では、学生は不安でその病院には応募できないでしょう。

本院では、平成12年度より必修化を念頭においた卒後研修システムを立ち上げて研修医の募集を行ってきました。研修システムを総合診療方式(必修化で採用される可能性が高い研修方式で、内科系および外科系の両者の診療科で研修を行うと共に、小児科及び救急診療部門で一定期間の研修を受ける方式を言う)に完全に変更することは困難であったため、従来の診療科ごとの研修方式であるストリート研修を残す方式をとりました。本院の研修プログラムでは、このストリート方式をAコースと呼び、これに専攻科での1年間の研修後に学内を3ヶ月ごとにローテイトする学内研修

(B)コースと2年目を研修協力病院でローテイト研修を行う学外研修(C)コースを併設しました。B、Cコースとも2年目の研修を総合診療方式に準じた研修として想定しています。Bコースでは学内の診療科を

内科系、外科系、小児系、救急系に分類し、研修医はこれらからそれぞれ1診療科を選択して3ヶ月づつローテイトします。これらの新しいコースへの研修医の応募は私の期待に反して初年度は14名のみで、残りの134名はすべてAコース(必修化によってこのコースはなくなるのですが)でした。その後10名がAコースにコースを変更したため、最終的に4名(B1名、C3名)のみが2年目の研修を受けています。今年度は12名(B2名、C10名)がこのコースを選択しています。

必修化になった場合どのような研修システムが認定されるか明確ではありませんが、中間報告(案)で述べられている研修体制に従えばBさらにはCコースも可能であり、この研修システムの実績を必修化までに積み重ねて学生が安心して選択できるようなプログラムにブラッシュアップしていくことが急務です。

この研修システムではローテイト研修が2年目に組み込まれていることから、16年度の応募者は14年度研修医の15年度(2年目)の研修を見て研修病院を選択することになります。来年度(14年度)は、その意味でB、

Cコースを選択する研修医を大幅に増やして実績を挙げる必要があります。本院並びに関連する研修協力病院を全国の学生に選択してもらえらるよう、彼らのニーズに答えられる研修内容を早急に構築していかなければならないのです。特に学内研修(B)コースを選択した研修医は2年間で3名しかいないことから、今後は学内研修を充実させるべく大学病院の弱点であるプライマリ・ケア研修の整備、内科・外科それぞれの共通カリキュラム作成等を各診療科および研修協力病院との協力のもと推進していきたいと考えています。

研修医の数の確保と同様、研修医の質の確保も重要です。より良い研修医を採用して、彼らを2年間の研修でさらに磨き上げていくような教育カリキュラムが理想です。現在、研修医の採用は診療科ごとに行われており、本院としての採用基準はありません。研修医採用の段階でのスクリーニングに有用な方法として、夏休みなどの休暇を利用した希望学生の病棟実習、面接、医師国家試験の成績、学業成績、学長の手紙、推薦状、医学校での評判等が挙げられています (JAMA 284:

1099-1104, 2000)。米国での方法なのでそのまま導入することは難しいですが、より良い研修医を採用するために来年度からでも診療科ごとに検討いただきたいと考えています。

本院における研修医教育は診療科ごとに行われており、自分達の後継者を育てるという意味合いから熱心に行われてきましたが、今後は本院全体で研修医を育成することになります。必修化によって研修プログラムに記載された研修目標が達成できたか否かがより厳格にチェックされ、達成できなければ修了証は取得できず、医籍への登録も行われません。研修医をマンパワーとしてばかりでなく学習者として見る視点もこれからは必要になります。研修医のような成人学習者をいかに教育するか、単に知識伝授型の講義を続けても研修医は集中できず教育効果は上がりません。彼らの興味を惹くような講義の工夫が求められ、指導医には今まで以上に教育・指導能力が要求されます。本院では平成12年2月に指導医の教育能力向上を目的として全診療科及び研修協力病院の指導医を対象に第1回臨床研修指導医養成ワークショップ

1099-1104, 2000)。米国での方法なのでそのまま導入することは難しいですが、より良い研修医を採用するために来年度からでも診療科ごとに検討いただきたいと考えています。

プを実施しました。本年も8月に学生にも参加してもらい同様のワークショップを企画しています。カンファレンス、ワークショップ、講習会など研修医に対する学習機会の提供も有用です。従来各科ごとに行われていたこのような勉強会を全研修医に開放して、バラエティーに富んだ学習を研修医ができるようにすべきです。第一外科では本年度から研修医なら誰でも参加できるM&Mカンファレンス(Morbidity and Mortality)の略で臨床上問題のあった症例の治療経過をレトロスペクティブに専門家の意見を交えて再検討する会)を定期的に実施しています。このような横断的な学習の場を診療科ごとに独自に企画し、それに全研修医がこれらにニーズに応じて参加できるようになれば、本院での卒後研修の魅力も増すように思えます。

卒後研修必修化により大学病院、関連病院共に卒後研修に留まらない領域にまで変革が及ぶ可能性があり、それに対応すべく我々のパラダイムも適正かつ迅速にシフトさせていくことが肝要です。

## 貫洞一夫先生の喜寿の祝 開催される

貫洞一夫先生が本年七十才となり、別表のような式次第で、喜寿の祝が平成13年7月15日椿山荘にて行われました。貫洞先生の元気を祝すとともに、先生の長年の労苦をねぎらい、会ま、終宴となりました。

発起人(順不同)  
加藤寛(慶応大学名誉教授

元政府税制調査会長、千葉商科大学学長)、武見敬三(東海大学教授、参議院議員)、中山恒明(東京女子医大名譽教授、消化器病センター名誉所長)、谷岡喜久蔵(前社団法人成蹊会会長、理事、顧問)、名尾良恵(元東京女子医大教授、三楽病院名誉院長、千葉大学医学部同窓会名誉会長)、

井出源四郎(元千葉大学学長、千葉大学医学部同窓会名誉会長)、多田貞敏(慶応大学名誉教授)、渡邊昌平(千葉大学名誉教授、千葉労災病院名誉院長)、浜野恭一(東京女子医大専務理事、東京女子医大名譽教授)、町田英一(元東京都民生局長、東京都民共済生活共同組合理事長、東京かたばみ会理事長)、川名教子(中山癌研究所理事)、川村正昭(大和自動車株式会社専務理事)、川村巖(宮園自動車株式会社社長、

全国福祉輸送サービス協会長)、柳光太郎(大和自動車株式会社相談役)、新田実男(元久我山病院長、老人保険ヒルトッププログラム施設長)、茂又貞祐(田村記念病院理事長、長汐達也(社団大成会長、汐病院理事長)、小幡裕(東京女子医大名譽教授、長汐病院理事顧問)、松村研二(東京都豊島区医師会長、長汐病院副院長)、貫洞哲夫(元東京都副知事、元全国信用保証協会会長、東京都国民年金基金理事長)

## 貫洞一夫喜寿の祝 式次第

司会者 東京なのはな会理事 新田実男

豊島区医師会長 松村研二

### 一、開会の辞

発起人代表 慶応大学法学部名誉教授 多田貞敏

### 一、主催者挨拶

1、慶応大学経済学部名誉教授 加藤 寛

2、千葉大学医学部同窓会なのはな会名誉会長 井出源四郎

3、衆議院議員、前国土交通副大臣 高橋 一郎

### 一、本人挨拶

千葉大学同窓会なのはな会参事 貫洞一夫

### 一、乾杯

千葉大学医学部同窓会なのはな会会長 長沢仁一

### 一、祝宴

獅子舞と共に会食に入る。

### 一、主催者挨拶

1、千葉大学医学部名誉教授、ちばばな会長 渡邊昌平

2、東京女子医大専務理事、名誉教授 浜野恭一

3、千葉大学医学部同窓会なのはな会名誉会長 名尾良恵

三楽病院名誉院長

一、乾杯 東京都議会議員 松本文明

大和自動車株式会社専務取締役 川村正昭

一、都議会議員挨拶 松本文明

東京都議会議員、自由民主党幹事長 林 朋之

一、来賓挨拶 山上健次郎

1、前千葉大学医学部同窓会なのはな会理事 平形義人

2、前千葉大学医学部同窓会群馬県なのはな会長 貫洞哲夫

一、閉会の辞 以上

元東京都副知事、東京都国民年金基金理事長 林 朋之

(註) ピアノ演奏 長汐病院副院長

林 朋之

以上

以上

以上

以上

以上

以上

以上

以上

## 平成12年度決算報告書

## 収入の部

| 款 項 目         | 予 算 額 (円)  | 決 算 額 (円)  | 対予算額 (円)   |
|---------------|------------|------------|------------|
| 会 費 等         | 24,700,000 | 22,873,750 | -1,826,250 |
| 他 会 計 より 受 入  | 5,520,000  | 4,739,804  | -780,196   |
| 寄 付 金         | 4,050,000  | 4,567,038  | 517,038    |
| 雑 収 入         | 70,000     | 533,289    | 463,289    |
| ( 当 期 収 入 計 ) | 34,340,000 | 32,713,881 | -1,626,119 |
| 前年度繰越資金受入     | 2,275,992  | 2,275,992  |            |
| 収 入 合 計       | 36,615,992 | 34,989,873 | -1,626,119 |

## 支出の部

| 款 項 目 (前) | 予 算 額 (円)  | 決 算 額 (円)  | 対予算額 (円)   |
|-----------|------------|------------|------------|
| 総 務 費     | 10,540,000 | 8,380,488  | 2,159,512  |
| 事 業 費     | 17,410,000 | 15,758,784 | 1,651,216  |
| 予 備 費     | 5,365,992  | 765,000    | 4,600,992  |
| 積 立 金     | 3,300,000  | 3,300,000  | 0          |
| 次 期 繰 越   | 0          | 6,785,601  | -6,785,601 |
| 支 出 合 計   | 36,615,992 | 34,989,873 | 1,626,119  |

## 平成13年度予算

## 収入の部

| 款 項 目         | 平成13年度予算額 (円) | 平成12年度決算額 (円) | 対前年度決算額 (円) |
|---------------|---------------|---------------|-------------|
| 会 費 等         | 22,900,000    | 22,873,750    | 26,250      |
| 他 会 計 より 受 入  | 1,300,000     | 4,739,804     | -3,439,804  |
| 寄 付 金         | 3,940,000     | 4,567,038     | -627,038    |
| 雑 収 入         | 40,000        | 533,289       | -493,289    |
| ( 当 期 収 入 計 ) | 28,180,000    | 32,713,881    | -4,533,881  |
| 前年度繰越資金受入     | 6,785,601     | 2,275,992     | 4,509,609   |
| 収 入 合 計       | 34,965,601    | 34,989,873    | -24,272     |

## 支出の部

| 款 項 目 (節) | 平成13年度予算額 (円) | 平成12年度決算額 (円) | 対前年度決算額 (円) |
|-----------|---------------|---------------|-------------|
| 総 務 費     | 10,820,000    | 8,380,488     | 2,439,512   |
| 事 業 費     | 18,910,000    | 15,758,784    | 3,151,216   |
| 予 備 費     | 1,935,601     | 765,000       | 1,170,601   |
| 積 立 金     | 3,300,000     | 3,300,000     | 0           |
| 次 期 繰 越   | 0             | 6,785,601     | -6,785,601  |
| 支 出 合 計   | 34,965,601    | 34,989,873    | -24,272     |

## 同窓会賞規定

## (目的と対象)

第1条 本規定は本会会員

(甲および乙)の学術お

よび文化諸分野における

顕著な功績に対し、これ

を顕彰することを目的と

する。受賞対象となる活

動は国の内外および地域

を問わない。

(顕彰の種類)

第2条 顕彰の種類は学術

賞および功労賞とする。

1、学術賞は、医学あるい

は医療活動の顕著な業績

により、学術的あるいは

社会的に高い貢献をした

会員(個人あるいはグルー

プ)に授与する。

2、功労賞は、医学あるい

は広く文化の各領域にお

いて千葉大学および千葉

大学あるいは同窓会に多

大の貢献をしたものに授

与する。

功労賞の区分は以下の四

種とする。

国際賞

国際交流および海外医

療の向上に尽くしたもの

教育・文化賞

教育、芸術およびスポー

ツなどの領域において功

績顕著なもの

医療・福祉・行政賞

医療・福祉・行政の分

野において優れた事績の

あるもの

社会功労賞

自己の危険を顧みず人

命救助したもの、公益の

ため私財を寄付するなど

功績顕著なもの

(同窓会賞選考委員会)

第3条 本会に同窓会賞選

考委員会を置く。

同窓会賞選考委員会は、

会長の諮問に応じ、その

はな同窓会賞の候補の選

考に関する事項を調査審

議する。

委員会は応募者の中よ

り学術賞5件以内・功労

賞3件以内の受賞候補者

を選考する。

(選考委員)

第4条 選考委員会の委員

は、そのはな同窓会常任

理事会が6ないし8名の

委員を推薦し、そのはな

同窓会会長が委嘱する。

委員の任期は、2年と

する。委員の再任は妨げ

ない。ただし連続2期ま

でとする。欠員が生じた

場合、補欠委員の任期は、

前任者の残任期間とする。

委員の互選により委員

長を置く。

(組織および運営の細目)

第5条 前条までに定める

もの他、組織および運

営の細目については常任

理事会の承認を得て選考

委員会が定める。

(申請応募の原則)

第6条 同窓会賞受賞希望

者は、同窓会賞募集要項

に基づき、所定の申請書

に必要事項を記載し応募

するものとする。

募集要項は、そのはな

同窓会報に掲載する。

申請は自薦・他薦を問

わない。

(受賞者の決定)

第7条 受賞者の決定は選

考委員会、常任理事会の

議をへて会長が行う。

(賞状および副賞)

第8条 受賞者には本会よ

り楯および副賞を贈呈し、

受賞対象となった業績、

氏名をそのはな同窓会総

会およびそのはな同窓会

報に公表する。

(記念講演)

第9条 受賞者はそのはな

同窓会総会にて記念講演

を行う。

付則

本規定は、平成9年11月

26日から施行する。

平成7年6月24日制定の

そのはな同窓会賞選考規程

および平成9年2月26日制

定のそのはな同窓会顕彰規

定(功労賞)は廃止する。

るのはな同窓会報 改版第一号（昭和34年3月1日） 抜粋

今度は如同窓会々報は従来の型式を改め、新聞様式を採用することとした。編集を医学部の学生有志に委託したが、学生委員は何れも有能で熱意があるの



# 同窓会々報の 改版について

[illegible]

谷川久治

尙、本学部出身者の就職、旋学外発展のためにもまた、秋行われる学術会議会員選挙などにも御協力をお願いする次第である。

❖当時の同窓会の様子を窺い知ることができます。詳細はゐのはな同窓会ホームページ（<http://www.inohana.jp/>）をご覧ください。

肺癌研究施設いよいよ本ぎまり

近年激増の傾向を呈とつてゐる肺病に對処すべく、本学部内に肺病研究施設を置くことといふので、動機が、一昨年頃より起つてゐた、いよいよ文部省からの予算も決定し、近々落成を迎へることになつてゐた。且つ予定では、教授二、助教二、技士の講座とし、臨床部門、基礎部門、公衆衛生部門の三部門として成立する事になつた。

クラブ便り

ヨ  
ツ  
ト  
部

C (日本外洋レシーティングクラブ) 主催の館山レース(三・五マイル)が去る三月二日葉山中・館山間にて行われ「くつにお哥」(艇長・三橋啓彦)は「むろ」「シヤーク」等日本一流のクルーザー十五艇に伍して出場、Aクラス四位総合六位の成績をおさめた。

やばい

三月二十三日より八日間にわたつて鶴岡練行として紀伊半島の尾鷲側より、那智、潮の岬、白浜等を訪れ、更に京都、奈良の旧蹟に遺遊して多大の成果を取めた。

卓球部

沢大医、二位千葉大医、三位新潟大医、四位信州大医学部  
 大医、五位三、四、五日、前橋において、春季東日本大リーグ戦を行ふ予定。

るのはな三七会

總會予定  
五月六日午後二時  
藤沢市片瀬岩本旅館集合、一  
旅館に宿泊。翌日鎌倉見物  
後、午後二時解散。  
御令室、御家族、御同伴の  
お出席願います。

會員總へて、喜ぶを越えた長壽者なれど諸兄・乾伸（一番奮氣）て、總会出席を願う。

なや第一高等学校医學部の追憶金が母校で開催の情報仄聞、確報を得て連絡いたします。

連絡者、大塚儀一、明卅七卒

埼玉縣支部だより

実行案が確定しましたら、二月上旬中に再報いたしますか  
お待ち下さい。

埼玉いのはな同窓会員も、現在では、百名余の多きに達しました。もつと良く調査をしたな

だ 支  
より 部

—

曜) 久し振りに総会を開きました。会場は浦和市埼玉亭、会す

母校からは遠路、谷川医学部

長、鈴木次郎教授の御出席を得

人事異動

千葉大学  
助教授昇任  
医療情報部  
高林克己(昭50)  
(松戸市立福祉医療センター  
東松戸病院より)

---

講師  
臓器制御外科学  
木村 文夫(昭57)  
(大宮赤十字病院より)  
精神医学  
橋本 謙二(九大薬昭57)  
(ウエルファイドより)

ゐの  
のは  
な同  
窓会  
賞

第7回(二〇〇二年度) むのはな同窓会賞の受賞候補者を  
左記により募集致します。

①学術賞 本会員（甲および乙）で、医学研究あるいは医療活動の顕著な業績により、学術的あるいは社会的に高い貢献をした個人またはグループ。特に学外での教育研究診療機関に居られる方と、学内では学位取得直後の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞 医学および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学るのはな同窓会に多大の貢献をした者。

①学術賞（五件以内）楯および副賞（総額二百五十万円程度）を贈呈します。

所定の申請用紙により、二〇〇二年1月7日から3月5日までの間に申請して下さい。

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。  
審査結果は二〇〇二年5月中頃までに各申請者に通知す

五、問い合わせおよび申請用紙請求先  
千葉大学医学部内 るのはな同窓会事務室

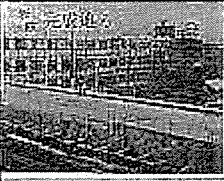
おくやみ

|    |            |               |    |         |    |           |    |            |    |        |    |        |    |          |    |              |    |         |    |         |    |         |    |         |    |         |    |            |    |         |     |         |    |         |    |         |    |         |    |         |    |         |    |        |    |         |    |         |    |         |
|----|------------|---------------|----|---------|----|-----------|----|------------|----|--------|----|--------|----|----------|----|--------------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|------------|----|---------|-----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|--------|----|---------|----|---------|----|---------|
| 岡安 | 恒武（日蘭大昭11） | 佐々木万之助（日大昭11） | 村上 | 喜雄（昭13） | 鈴木 | 雅晴（新大昭15） | 鈴木 | 千春（昭16・12） | 近藤 | 太（昭18） | 後藤 | 繁（昭19） | 森川 | 不二男（昭19） | 豊三 | 等瑞幸・正五位に叙された | 大滝 | 千尋（昭20） | 末永 | 直光（昭20） | 溝口 | 武寿（昭20） | 石田 | 正一（昭21） | 佐藤 | 順泰（昭21） | 高橋 | 建三（新医大昭23） | 飯島 | 常喜（昭25） | 五十嵐 | 一郎（昭25） | 小竹 | 正臣（昭25） | 梅沢 | 恂二（昭26） | 砂金 | 美和（昭28） | 卜部 | 謹也（昭28） | 猪狩 | 好令（昭31） | 中野 | 勝（昭39） | 柳橋 | 雅彦（昭46） | 須田 | 隆文（昭54） | 牧野 | 康彦（昭61） |
|----|------------|---------------|----|---------|----|-----------|----|------------|----|--------|----|--------|----|----------|----|--------------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|------------|----|---------|-----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|---------|----|--------|----|---------|----|---------|----|---------|

るの は な 同 窓 会 報 昭和34年3月1日 改版第1号

### 日本医学総会

千葉学旅  
大いに気を吐く



日本医学総会  
千葉学旅  
大いに気を吐く

日本医学総会  
千葉学旅  
大いに気を吐く

### 同窓会費

原稿募集

同窓会費  
原稿募集

### 千葉学旅

大いに気を吐く

千葉学旅  
大いに気を吐く

### 本年度医学生

千葉にて開催か

本年度医学生  
千葉にて開催か

### 同窓会費

原稿募集

同窓会費  
原稿募集

### 千葉学旅

大いに気を吐く

千葉学旅  
大いに気を吐く

### 河合先生のもとに学んで

思い出の出

河合先生のもとに学んで  
思い出の出

### 恩師思い出

思い出の出

恩師思い出  
思い出の出

### 千葉学旅

大いに気を吐く

千葉学旅  
大いに気を吐く

### 医学生ゼミの終り

千葉にて開催か

医学生ゼミの終り  
千葉にて開催か

### 同窓会費

原稿募集

同窓会費  
原稿募集

### 千葉学旅

大いに気を吐く

千葉学旅  
大いに気を吐く

# 平成13年度 るのほな同窓会総会議事録

日時

平成13年6月23日(土)  
15時

場所

千葉ベリエホール

会務報告

鈴木信夫理事より、昨年度の会務報告がなされた。

庶務関係として、常任理事会、総会、四金会等の会議

各支部との交流について説明があった。会計関係として

決算の概要、事業関係として学外研究助成、同窓会

賞、同窓会報の概要について説明があった。

議題

長澤仁一会長が議長に選出された。

一、平成12年度決算案について

木内政寛理事より、決算内容についての説明と、国

井光智、笠川猛両会計監事より、監査報告があり、決算案が承認された。

二、平成13年度事業計画について

滝口正樹理事より、同窓会報の充実、るのほな同窓

会賞の充実、学内・学外への各種助成の充実、会費自

動振替の推進等の同窓会活性化の施策について説明が

あった。さらに、学生用図書購入の助成、ホームページの作成を含む同窓会ネットワークの整備、各支部の活性化支援について説明があった。各々、承認された。

三、平成13年度予算案について

木内理事より、会報の充実、るのほな同窓会賞の充実等、前年度との相違点について説明があり、予算案が承認された。

四、名誉会員の推薦について

近藤洋一郎副会長より、平成13年3月に退官された中島伸之、増田善昭両教授の名誉会員への推挙について説明があり、承認された。

五、役員の交代について

滝口理事より、小杉秀雄理事から村瀬靖理事への、増田善昭理事から白澤浩理事への交代について説明があり、承認された。

六、千葉大学校友会(仮称)の設立について

近藤副会長より、千葉大学校友会(全学同窓会)設立骨子、会則案について説明があり、加入が承認された。

報告事項

一、学外研究助成選考について

矢野明彦理事より、委員会による選考経過と各受賞者の推薦理由の説明があった。

二、同窓会賞選考について

矢野理事より、委員会による選考経過と功労賞、学術賞の各受賞者の推薦理由の説明があった。

三、同窓会報関係

白澤理事より、会報のさらなる充実に向けての編集方針について報告があった。

四、同窓会名簿の発行について

滝口理事より、米年秋の名簿発行に向けての計画について報告があった。

近藤副会長の閉会の辞により、閉会となった。

るのほな同窓会賞表彰式

矢野理事の司会のもと、功労賞、学術賞の表彰が行

われた。長澤会長のご挨拶に続き、表彰盾が授与された。各受賞者のご挨拶を頂いた。

特別講演

矢野徹先生・千葉県精神保健福祉センター長

「現代の若者はエイリアンか」

渡辺副会長の司会により、矢野先生の講演を拝聴した。懇親会

茂又理事の司会、近藤副会長の閉会の辞、長澤会長の挨拶に続き、貫洞一夫前副会長の長年のご貢献を謝し、長澤会長より記念品贈呈が行われた。香田真一理事の閉会の辞により閉会となった。

## 四金会のお知らせ

日時

平成13年11月28日(水)、午後5時45分より。

場所

千葉スカイウインドウズ東天紅(千葉駅前すぐ西隣りセンシティタワー22階)

会員の方々に個々には御連絡は致しませんが、是非奮ってご参加下さい。

会費は三〇〇〇円

## 日本医師会医学賞受賞

磯野可一

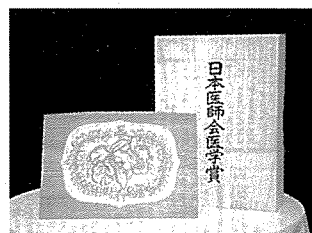
千葉大学学長(昭33)

安達恵美子

千葉大学大学院医学研究院教授(昭37)

日本医師会より「医学上重要な業績をあげた方々に授与される」日本医師会医学賞を、ここ数年の間に同窓のお二人の先生が受賞されました。ここに改めてご紹介申し上げます。日本医師会医学賞は、基礎医学・社会医学・臨床医学部門で、それぞれ一人のみに授与される大変名誉ある賞です。

磯野先生は「食道癌外科治療成績の向上と手術術式の確立―胸部食道癌に対する3領域リンパ節隔清術―」(平10年)、安達先生は「視神経炎―診断から視神経移植まで」(平12年)という



受賞の楯

テーマで受賞されています。過去千葉大学に在籍中の教授で受賞された方は昭和43年度の基礎部門で病理の岡林篤教授のみであるということからも、この賞がいかに得難いものであるかお判り頂けるものと思います。



磯野可一学長



講演中の安達教授

訂正とお詫び  
127号で、左記の誤りがありました。

千葉県職員異動

佐藤一樹(平4)氏の

千葉市立海浜病院よりの異動は同姓同名の方の誤りでした。

多大のご迷惑をおかけしたことを、誠に申し訳なくお詫び申し上げます。

## 編集後記

若い会員の方々が積極的に参画できる「るのほな同窓会」は同窓会の大きな目標の一つです。若い会員の方々にとって、ホームページ(HIP)が同窓会に一層思いを寄せる契機になればと思います。

今回HIPに掲載した改版第一号は編集部に保存されていたものですが、五十号まではB4版の新聞紙に印刷されているため、触るのにも気を使わねばならない程傷んできています。

電子ファイル化による保存が急務なのですが、編集部には第85号が保存されておりません。もしもお持ちの会員がいっしょにいましたら、編集部にご一報下さい。

(白澤 浩・昭57)